中等教育國語讀本 新村出編 巻一

4a
810
大7

41706
教科書文庫
4
810
41-1918
20000
65657

資料室
43
810
大7

文部省檢定濟
大正七年一月廿六日　中學校國語科用

文學博士新村出編
中等教育國語讀本

東京　開成館藏版

廣島大學
教
65657
圖書

凡例

一、本書に採錄せる文章、教科に適せしめんがために、いづれも編者の私意によりて多少の删修を試ざるはなし。是作家に對して編者の深く謝するところなり。每章、首に作家の名を註し、もしくは尾に書名を註したれど、その殊に改竄の甚だしきものは、單に所依にとゞまる旨を特記せり。

二、漢字使用法、送假名法及び句讀法等は、編者の信ずるところに從ひて、實用に適せんことを主とし、煩瑣なる考證に趨るを避けたり。漢字は必ずしも俗字和字等を厭はず、便宜これを使用し、句讀點は上級に進むに隨ひて次第に省略せり。

三、教材の配當、用語の選擇につきては、他の教科との聯絡統合に最も意を用ゐ、外國地名人名の稱呼は一に史學會の調査に據り、歴史科及び地理科にて授くるところと一致せしめたり。

大正六年九月

編者

卷一　目次

一　新生活　長谷川二葉亭　一
二　日記の七德　五
三　出鄕　七
四　勝安芳の苦學（海舟言行錄）　藤岡東圃　一三
五　田舍より　尾上柴舟　一六
六　春のあした　岸上鎌吉　二〇
七　魚の旅行　柳澤淇園　二三
八　鯨とり（捕鯨船）　二七
九　堪忍　三三

一〇　字音　巖谷小波　四二
一一　干支と五行　三八
一二　馬　三五
一三　奈良の初夏　金子薫園　四七
一四　田植始　川上瀧彌　五三
一五　金魚　岸上鎌吉　五六
一六　心の修行　村井弦齋　六二
一七　米國學生の美風　奥田義人　六六
一八　海水浴に友を招く　大町桂月　七二
一九　文を學ぶ人に　同　七五
二〇　富士登山その一　藤岡東圃　七八

二一　同　同　八五
二二　田園の夏　杉村楚人冠　八九
二三　野寺の鐘　佐々木信綱　九六
二四　奇遇その一　櫻井忠溫　九七
二五　同　その二　同　一〇二
二六　任務（時局に關する教育資料）　一〇五
二七　得道　細川潤次郎　一〇九
二八　空中の接戰　一一一
二九　馬の看護　澁川玄耳　一二四
三〇　猿島　川上瀧彌　一二九
三一　寫眞を請ふ　一三四

三二　秋の七草　松村任三　一三七
三三　傳家寶　細川潤次郎　一三一
三四　リンカーンの少年時代　その一　一三五
三五　同　その二　一四一
三六　二宮尊德の幼時　その一　幸田露伴　一四六
三七　同　その二　同　一五一
三八　廣瀨中佐　巖谷小波　一五六
三九　國引　一六二

中等教育

國語讀本　卷一

文學博士　新村出　編

一　新生活

四月一日。快く晴れたり。

新生活始る。久しく小學校の兒童と呼ばれて、義務として教育を受け來れるわれは、今や進みて、おのが望める學校に入り、今日よりはその生徒となれり。

七時過ぐる頃、登校す。六年前、保護者としてわれを小

伴　宣　懇　導

學校に伴なひゆきたまひし父上、今日は保證人として、また共に來たまふ。八時、講堂にて、入學式行はる。校長おごそかに校訓を宣せらる。修學の心得を諭さること、懇なり。感更に深し。ひそかに成功を期す。式終りて、定められたる教室に導かる。小學校よりの友たる加藤君、福島君も、同じ組なり。十時半校門を出づ。顧れば、校庭の櫻數株、はや二三分咲きいでたり。

午後は明日の日課の豫習をなす。いづれの圖書も珍しからぬはなきに、目うつりのして、思はず、徒らに時を過したるも、をかし。

馳　喇叭響　紹介　辭　挨拶

二日。晴。

午前七時十分、家を出で、登校す。至れば、よき頃なり。今日より授業始るとて、全校の生徒皆來たるらし。廣き運動場も、われら新入生の馳せまはるには、狹きやうなり。やがて喇叭響きて、一同、運動場に整列す。新舊生徒紹介の事あり。見あぐるばかりの立派なる上級生一人、列を離れて、われらに向かひて、ほがらかに歡迎の辭を述ぶ。われは新入生總代に選ばれ、すゝみ出でて挨拶をなしたるに、何を言ひたるか、覺えず。

この日、日課五時間科毎に異なる先生を迎へて、いづ

聽恨

れの講話をも面白く聽き、放課の早きを恨めり。加藤君等と語りあひながら歸る。

三日。快晴。　神武天皇祭。

始めての休日なり、まだ課も進まぬに、豫習、復習とて、さしたることなければ、午後より弟妹と散歩に出づ。

校章被　摘　暢

新しき校章かゞやく帽を被りたるたれかれに出であふ。いづれも嬉しげなり。近きあたりの小川の堤にて、いろ〳〵の草を摘みなどして、夕、家に歸る。心暢びたる樂しき一日なりき。

庶　予　夙　蓋　懶

二　日記の七德

わが國には、古より、上は王公大人より、下は匹夫庶人に至るまで、日記をしるす習あり。これら古人の日記を見て、予は夙く思へらく、日記をしるすには七つの德ありと。

蓋し一身一家の事、世上の事、日常思ひもし、感じもし、又見聞し、經歷せし所をしるすが故に、知らず識らず、日記をつくる人の觀察力を鋭敏にし、周密にすること、その一なり。初のほどは、日記をつくるに懶く、或は

慣斬忍而耐

單に陰晴を注して、その下を空白にすることなど、多きが、次第に慣るゝに隨ひて、漸く委しくなり、その間におのづから忍耐力の養はれたるを感ぜしむること、その二なり。日々の記事を了へたる後、これに向かへば、恥づかしくも、または物足らぬやうにも、思はることありて、恰も明鏡に對したらんが如く、わが身を省るたよりとなること多し。これその三なり。思ふこと言はざれば、腹ふくるゝは、人の常なり。さりとて喜怒哀樂うちつけに他人に分つべきにあらず。かゝる場合に、これを日記にしるすときは、日記こそ心の

錄

置かれぬ無二の友なれと、喜ばるゝこと多し。これその四なり。老いたる後の回顧の料となること、その五なり。筆まめとなること、その六なり。而して王公大人の記錄はさらなり、匹夫庶人の日記なりとも、いづれか後の世の歴史家の好材料たらざるべき。これその七なりとす。

予はこの七德を擧げて、子弟を教へ、日記をしるす習慣を養はしむ。（馬琴日記鈔の序による）

三　出郷

長谷川二葉亭

杯　頻咳　洟　呂李

いよ〳〵出發の當日となつた。待ちに待つたその日ではあるけれど、今となつては、どうやら一日ぐらゐは延してもよいやうな心持になつてゐるうちに、支度はずん〳〵出來て、さて改つて父母と別れの杯の眞似事をした時には、何だか急に胸が一杯になつて、ついほろりとした。母はもとより泣かれた。快活な父までが、「めでたい、めでたい。」と言ひながら、頻に咳をして洟をかんでゐられた。

あつらへの車が來る。せつかちの父が、まづあわて出されて、「それ、風呂敷包を忘れるな。行李はよいか。小い

蝙蝠傘　笞　載　想　手眞似　騒　視

方だぞ。蝙蝠傘はおれが持つてゐてやる。」と、座敷中をうろ〳〵せられる。もとより見送つて下さる筈なので、やがて自分も一臺の車に乘られたが、それでもまだ「何は載つたか、何は……。それ、何よ……。」とあせる程なほ想ひ出せないで、何やら分らぬ手眞似をして、獨り無上に車の上で騒がれる。

母も門口まで送られた。いよ〳〵車が出ようとする時、悲しさうにぢつと私の顔を視て、「ぢや、御前ねえ、からだを……。」とまでは言はれたが、後が續げないで、涙になつた。

Station ステイション

機嫌　儘　紛　杯

私は、わざと附け元氣の高聲で、「御機嫌よう。」と一禮すると、車が出たから、その儘眞向きになつてしまつたが、何だか後髪を引かれるやうで、車が横町を出離れる時、ちよつと後を振向いて見たら、母はまだ門前にしよんぼりと立つてゐられた。

道々もわざと平氣な顔をして、往來を眺めながら、勉めて心を紛らしてゐる中に、なじみの町を幾つも過ぎて、車がステーションに著いた。まだ發車には餘程間があるのに、もう場内は一杯の人で、ごた〳〵と騷がしい。親しい友のたれかれも見送に來てくれた。その

汽笛　窓　挨拶　沙汰

顔を見ると、私は急に元氣づいて、例になく壯にしやべつた。何だか皆が私の擧動に注目してゐるやうに思はれてならなかつた。無論、友達は、家で立ち際に私の泣いたことを知る筈はない。

やがて發車の時刻になつて、汽車に乘込む。手持無沙汰な、落著かぬ數分も過ぎて、汽笛が鳴る私が窓から首を出して挨拶をする時、汽車

Flutform
プラットホーム

は動き出して、目をしよぼつかせた父の顔が、ちらりとして、すぐ後になる。見えなくなる。もうプラットフォームを出離れて、白ペンキの低い柵が走る。その向かうの後向きの二階家が走る。平家が走る。片側町になつて、人や車が後へ走るのがをかしいと、それを見てゐる中に、眼界が忽ちからつと明るくなつて、田圃になつた。目を放つて見渡すと、城下の町の一角が、屋根は黑く、壁は白く、ごたく〳〵とかたまつて見えるむかうに、生まれてから十二年の間、毎日仰ぎ見た御城の天主が、遙に森の中に聳えてゐる。あゝ家はあの下だ……

柵　階　圃　遙　聳

と思ふ時、始めて故郷を離れることの心細さが身にしみて、しよんぼりとしたが、その側から妙にまた氣が勇む。何だか籠のやうな、せゝこましい處から、茫々と廣い明るい空のやうな處へ、放されて飛んでゆくやうで、何となく心臓のしまるやうな氣もするが、また何處か、のんびりと、急に脊丈が延びたやうな氣もする。

妙　茫々　脊

四　勝安芳の苦學

勝安芳、若き頃、西洋式の兵術を學びしが、舶載の兵書

載

極めて少く、常に良き書の得がたきを歎ぜり。ある時、市中の書肆を過ぎて、新刊の一書を見、これを購はんと思ひて、その價を問へば、五十兩と答ふ。當時、書生の身分なれば、五十兩の金は直に得べからず、十數日を經て辛うじてこれを調へ、勇んで書肆に至れば、かの書は既に賣れてなし。安芳遺憾にたへず、買ひたる人を問へば、四谷に住める與力某なり。卽ち歩を轉じてこれを訪ひ、切に情を陳べ

勝安芳

四谷　今の東京市の西部の地。

本所　今の東京市の東部の地。

て、兵書の讓渡を請ふに、某聽かず。已むを得ず借覽を請へども、なほ聽かず。乃ち曰く、「晝間は足下に用あらん。夜間寢ねたる後は、貸さるとも不可なかるべし。」と。某その執拗に驚き、答へて曰く、「夜更けて後は、貸すとも可なり。然れども戶外に持ち去ることを許さず。」と。安芳翌夜よりその家に通ひ始めたり。

當時、安芳の家は本所に在り、某の家と相距ること殆ど一里半。されど雨風烈しき時も、曾て往復を廢せず、又一夜もその時刻を違へず。かくの如くすること半年餘にして、遂に八卷の兵書を手寫するを得たり。乃

ち更に主人に面會し、全部を寫し終へたることを告げて、その厚意を謝し、且二三の不審（フシン）の點を擧げてこれを質す。主人驚いて曰く、「僕は寫すべき勞もなきに、まだ足下の如く全部を通讀するに至らず、實に慚愧（ザンキ）にたへず。野人寶をもつとも何にかせん。請ふ、この書を足下に呈せん。」と。安芳、既に寫せる一部を有すればとて、再三固辭すれども、主人聽かず、安芳遂にこれを受けたり。

（海舟言行錄）

五　田舍より

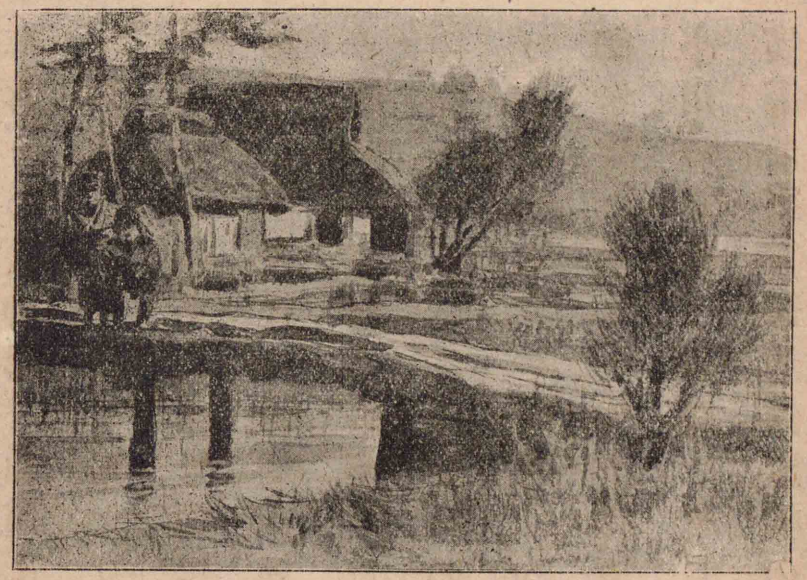
藤岡東圃

拜啓。その後、御起居如何に候か。昨秋一家擧つてこの地に移り候うてより、往來する友もなく、日日一里の道を學校に通ふのみにて候ひしが、この頃は學校は休に相成り、又春の景色におのづから心もうき立ち候へば、日々弟妹と共に田野の間をあるきまはり、例の水彩畫をも試候。そのうち最近のもの一枚、こゝに說明を附して、別に御送申上候。

小川のむかうに高き松見え候。その下の藁屋が僕等の家に御座候。土橋の上に立ちたるは、弟と。

藁　彩

菖蒲　蓮華　垂　刈筆



妹とにて候。堤に様々の色にてゐがきたるは、若草の中に菫花、蒲公英、蓮華草などの咲き亂れたるにて、土筆も多く出で、妹などは時々前垂一杯にして歸り候。堤のあなたに綠の色こきは、麥畠にて、まだ穗は出でず、遠

陽炎　昇　雲雀　塵　啼　逆落　藪　鶯　囀

く菜の花は一面に黃色に咲きて、その上にひらひら蝶の舞ひ居り候。

すかし見れば、野にも、山にも、陽炎と申すもの、火鉢の上に火氣の昇るが如く、ちら〳〵と動き居り候。これは畫にはかけ申さず候。雲雀も畫中には入らず、青天に一點の塵と見ゆるほど小く、聲ばかり高きが、やがてふつと啼き止みて、逆落しに麥畠のうちに落ち候。山陰の藪には、今も鶯の囀り居り候。この邊にては、夏の頃までも、かやうに啼き續くる由に御座候。

匆々

この度はこれにて筆を止め候。都の友ゆかしく、上野、日比谷の春色も思ひやられ候。御近況御知らせ下されたく、待ち奉り候。匆々。

尾上柴舟

柳　星　鐘

六　春のあした

紫にほふ山のはの
雲より、夜のあけゆけば、
柳のつゝみ、星きえて、
野寺の鐘の音すなり。

鴉　薄煙

みあかし殘るうぶすなの
森の櫻の見えそめて、
鴉むれゆく松原の
末よりのぼる薄煙。

水ゆたかなる川ぞひの
麥生の霞、やゝ、晴れて、
朝だちいそぐ旅人の
小笠の上に、雲雀啼く。

七　魚の旅行

岸上鎌吉

魚はいつも一つ處にねるものばかりではない。中には隨分遠距離の旅行をするものもある。この旅行は處定めず、ぶら〳〵と歩きまはるのではなく、略一定した道を辿るのである。ちやうど渡り鳥が、處えらばず安に飛び歩くことはせず、毎年必ず定まつた道筋を取つて、多く島から島へと渡りゆくのと同様である。かやうに旅行する魚を廻游魚といふ。

何しろ廣い海の中で、しかも深い水の中での事であ

るから、その旅行の道筋のはつきりした細かい點は、今ではまだ解つてゐない。たかし、おほよそは知れてゐる。渡り鳥が長い旅行をするには、ちやうど飛石をつたうてゆくやうに、必ず陸地陸地を辿つて飛んでゆく。廻游魚類もそれと同じく、多く陸地に沿うて旅行を續ける。さうして彼等が或灣や或沖に現れる時節も、大抵定まつてゐるのである。

廻游魚類が遠い旅行をする時には、必ず大きな群を作る。種類によつては、その一團體の魚の數が幾萬といふ程、多い。又南から北へゆくものもあれば、反對に

鰹　黒潮　徘徊　餌

北から南へゆくものもある。南から出たものは、北を廻つて再び南へ歸り、北から出たものは、南を廻つて復北へ歸る。かやうに廣く遠く廻り廻つて旅行するのは、一つは食物を求めるため、一つは適當な場所を見つけて卵を産むため、今一つは自分の好む水溫の處に居りたいためである。

鰹の往來する道筋は、他の魚に比べると、割合に陸から遠い沖合にある。殊に黒潮の流れるあたりに多い。隨つてその通路は溫度が高く、水が美しい。途すがら餌の多い處にかゝると、そこを長く徘徊し、餌のない

暗礁　狙　認　屢　有

處は早く通り過ぎる。島や暗礁のある處は、食物が多いから、どうしても足を止める。漁夫もそこを狙つて捕りに行くのである。

鰹の泳ぐ速さはなかなか早い。全速力を出して泳ぐ時には、船足の可なり早い汽船も、及ばぬ程である。少くとも一時間に二十浬は泳ぐものと認められてゐる。帆船などが沖を走つてゐると、屢鰹の群が近寄つて來て、船について一緒にゆく。幾日も幾日も船の後から泳いでゆく。どういふものか、鰹は大きな物に附いて歩くといふ妙な性質を有つてゐる。鯨にもつい

緒　頂戴

て歩く。鯨と一緒に歩くのは、鯨が種々のものを捕つてたべた、そのたべ餘りを頂戴する利益があるからではなからうか。船について歩くのも、それから得た

慣習

習慣とも思はれる。とにかく鰹の群が屢船について歩くのは、事實であつて、それが、遠く船路を行くものに取つて、面白い慰みにもなり、時には釣つてたべる

慰

便利にもなる。

仔鮭　鱒

魚の旅行をするのを見ると、多くは故郷に歸る性質のあることが、解る。鮭や鱒のやうに、海で育つて河に來て仔を産むものは、自然と自分等の産まれた元の

淡水　遇

河に歸るのが多い。海を泳いでゐる中に、河から流れて來る淡水に遇ひ、これに便つて河口を見つけるものらしい。そこで漁業者は、自分自分の河に、なるべく

鯛

多くの種を入れて、大きくなつてから、そこに歸らせるやうに努めてゐる。鯛も中國、九州あたりのものは、

琴平

多く瀬戸内海に來て、卵を産む。春になると、東西の海

琴平　瀬戸内海の南岸、香川縣仲多度郡。琴平町あり。

峽からどん〳〵入込んで來て、琴平の下の海に集る。

鰒

その數は實に鰒しい。

八　鯨とり

冒險　舷吊　櫂杖　舵取　槍敢　鉾艫

午後三時二十分、とゞめの銛を撃つた。當つたけれど、鯨は死なぬ。そこでいよ〳〵捕鯨事業中の大冒險である端艇進撃が令せられた。

左舷に吊つてある二間未滿の小端艇は、忽ち下されたこの端艇は二人して二梃宛の櫂で漕ぐのである。舵取は居らず、進むも、退くも、右へも、左へも、皆二人の櫂でやるのである。その勇敢な乘組はと見ると、二人の水夫と船長とである。船長は槍のやうに見える四間あまりの銛を持つて、端艇の艦に突つ立つて居る。その昔、朝鮮征伐に、槍を杖にして船頭に立つた鬼上

鬼上官　加藤清正。

征伐　杖　叫　反射　焔　巨　揚　冷汗　浮標　危險

ニコライ丸　當時の捕鯨本船。

官の堂々たる姿を洋式で見るやうである。余はむやみに帽を振つて、萬歳を叫んだ。

三人の突撃者は、血と潮とを噴き上げる下に、無二無三に進み入つた。血煙は日光に反射して、火山の焔に異ならぬ。忽ち端艇は巨鯨の胴中に乘り揚げて、船體は一本立ちとなり、人は皆逆さまになつた。ニコライ丸から見て居る者は、皆冷汗をかいた。いつも沈著な砲手までが、この時ばかりは救命浮標に手を掛けようとして居る。

まことにこの端艇突撃ぐらゐ危險な事業はない。若

觸（ふれ）　微塵（みじん）　碎（くだ）　撥（はね）　窮（きゅう）　狂（くるう）　慄（おのの）　渦（うず）

し鯨の尾羽（をは）か手平（てひら）かに觸れようものなら、船體はすぐ微塵に碎けてしまひ、乘組は無論撥ね飛ばされて、助かつた所で一生の不具者となるのである。鼠一匹でさへ、窮した時には近寄れぬのを、これは巨鯨の死物狂。大變な事になつて來たと、余は船橋で慄へずには居られなかつた。

唯見る、艦の船長、力と賴む一本の銛をしごいて、鯨の心臟部目がけて突つ込んだ。同時に、鯨の體は海中に沈み入つて、絶大な血の渦卷。

端艇は山の頂から谷底に落ちたやうに吸ひ込まれ

筏師　竿　泥川　懸　繰　穂　槌

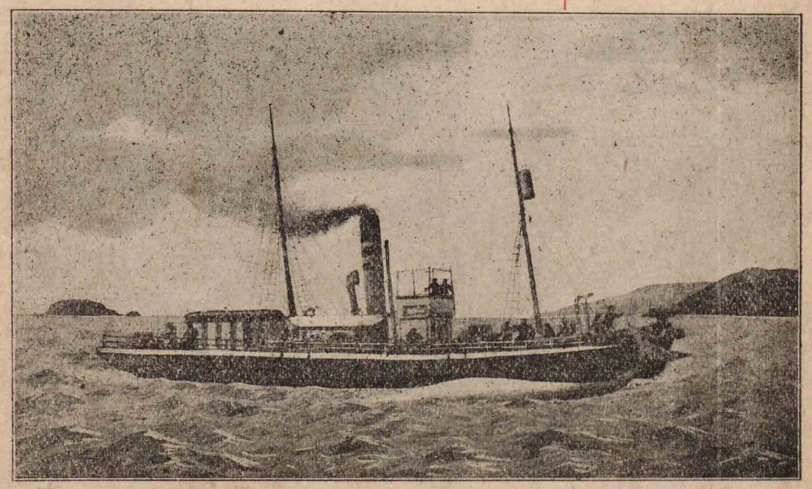
た。二人の水夫は必死となつて櫂を動かして居るが、船長はまだ銛を放さぬ。筏師が竿を泥川に突き立てたやうな形で、一所懸命に力を入れて居つたが、急にそれを引拔くや否や、「それ」とばかり、五六間、後退を命じた。

引くか引かぬ間に鯨はまた浮き上つた。それと見ると、奮然、端艇を再び乘り揚げて突く。沈む、退く、浮く、突く、これが四回ばかり繰返されたので、六尺餘の銛の穂先は弓のやうに曲つてしまつた。

豫て用意した鐵槌で、退いては打ち直し、曲ればまた

刺　碧

打ち返して突く。遂に船長は、えい面倒なといふ風で、曲つた穂先を舷側に打ちつけて、反を返し、今しも浮き上つた鯨の手平の下を深く突き刺したので、さしもの大動物も全く絶命し、両方の手平を高く立て、雪のやうな眞白の腹を出して碧海に一の字となつた。」



捕獲したる鯨を曳いて港に歸る圖

鎖　牡　堪忍　盲

「萬歳」は始めて船員の口から出た。時に三時四十一分。それからその鯨をウィンチで引き寄せて、右舷側に鐵鎖で結び付けた。尾を先にして頭を後にしたが、大方ニコライ丸の八九分までであつた。身長を計つて見ると、六十一尺、胴の周圍の最廣部が二十四尺。長須鯨の牡であると、船長は教へた。

（捕鯨船）

九　堪忍

柳澤淇園

或人、文盲なる者を意見して、「世の交は他の事はいらず、唯堪忍の二字をよく守るべし。」といふ。文盲の人首

を傾け、「かんにんとは四字にて候はずや」と、指にて數へ、「御許の思ひちがひなるべし。かんにんの四字にて候ふ。」といふ。意見せる人、「愚昧の人かな。堪忍とは、たへしのぶと書きて二字なり。」といへば、また首を傾け、「たへしのぶならば、又一字ふえたり。五字となりぬべし。何と仰せらるとも、吾等は四字と思ひ候へば、四字にてかんにんは致し候ふなり。」といふ。

かの意見せる人、この度は、「汝が如き愚昧の者は、實に諭し難し。人に似て蟲同様なり。己が儘にすべし。」とて、大いに憤りければ、文盲の人笑ひて、「何とも仰せらるべし。吾等はかんにんの四字を知り候へば、惡口せられても少しも腹立ち候はぬなり。」とて、笑ひ居たりきとぞ。

一〇　字音

國語ガ支那語ニ接觸シ始メタル年代ハ明ナラズ。漢字ノ始メテ輸入セラレタルハ、應神天皇ノ御代ナリト、國史ニハ傳ヘラルレド、事實ハ遠ク其ノ以前ニアリシコト勿論ニシテ、是ハ日韓交通ノ歴史ノ上ヨリモ考フルコトヲ得ベシ。

文字ノ輸入セラレタルト共ニ、字音モ傳リタルコトハ、言フマデモナシ。此ノ漢字ノ輸入ハ單ニ一時期ニ止ラズシテ、後世マデモ繼續シ、且種々ノ徑路ヲ經タレバ、字音ニ吳音、漢音ナドノ種類生ジタリ。吳音ハ支那ノ南部ニ行ハレタル音ニシテ、漢音ハ北部ニ行ハレタル音ナリ。

繼續

此ノ吳音ト漢音トハ、漢字ノ普通ノ字音ニシテ、一般ニ相竝ビテ、我ガ國ニ行ハレタリ。其ノ後、唐音トイフモノ少シバカリ傳ルアリ、現今ニ至リテハ、今ノ支那音、主トシテ地名ナドニ用ヰラレテ、更ニ輸入セラレ

タリ。

此等ノ字音ニ就キテ數例ヲ擧グレバ、京都、東京ナドノ場合ノ如ク、京ヲきやうトイフハ吳音、京師、京城ナドノ場合ノ如ク、京ヲけいトイフハ漢音ニシテ、南京、北京ナドノ場合ノ如ク、京ヲきんトイフハ唐音ナリ。行ノ字モ、其ノ音ニハぎやう、かう、あんノ別アリ。通常、行燈、杏子、蒲團ナドノ如キハ、唐音ニテ行ハレ、上海、太沽、香港ナドノ如キハ、支那音ニテ行ハル。

行燈 杏子 蒲團 上海 太沽 香港

我ガ國ニテ用ヰラルヽ漢字ハ、盡ク皆此等ノ四種ノ音ヲ一字ニ具フルニハアラズ。漢音ノミノ用ヰラル

概言

宙

ルモノ、吳音ノミノ用ヰラルヽモノ、其ノ他、種々ニシテ、概言スベカラズ。

一一　干支と五行

支那では、萬事を陰陽の二つで説明しようとして居ます。卽ち陰と陽との配合で萬物が出來るといふのであります。しかも一方では木火土金水といふ五つの氣を宇宙の現象に配合して、萬物生成の理を明にしようとして居るらしく、これを五行といひます。この五行に陰性のものと陽性のものとを設けて、木の

子寅
辰午
申戌
丑卯
巳未
酉亥

所謂

陽、木の陰、火の陽、火の陰などを作れば、十のものが出來る。これが卽ち十干であります。日本で甲を「きのえ」、乙を「きのと」と訓むなどは、木の兄、木の弟などの意であります。

別に十二支といふのがあります。これにも支那人は陰陽を配し、子寅辰午申戌の六つを陽、丑卯巳未酉亥の六つを陰とし、六陰六陽で、十二支となるといふて居ます。

さて十干と十二支とを組合はせると、六十の配合が出來、所謂六十甲子を得ます。この六十甲子を年月日

記録

に配合してゆくことは、時を記録する上に、誤を避けるのに極めて便利であります。歴史上の記録にも、年數の外に干支を記して置きますれば、六十年の誤をせぬ限、干支によつて、その年が何年であるかを間違なく判斷することが出來て、重寶であります。この干支によつて占をするものがあるが、これは一種の迷信に過ぎないと思ひます。

判斷

序

五行の順序は、木火土金水となつて居ます。この順序は、支那の古聖が深く理窟の上から考へ出したものであるらしいのであります。支那では、この五行を何

窟

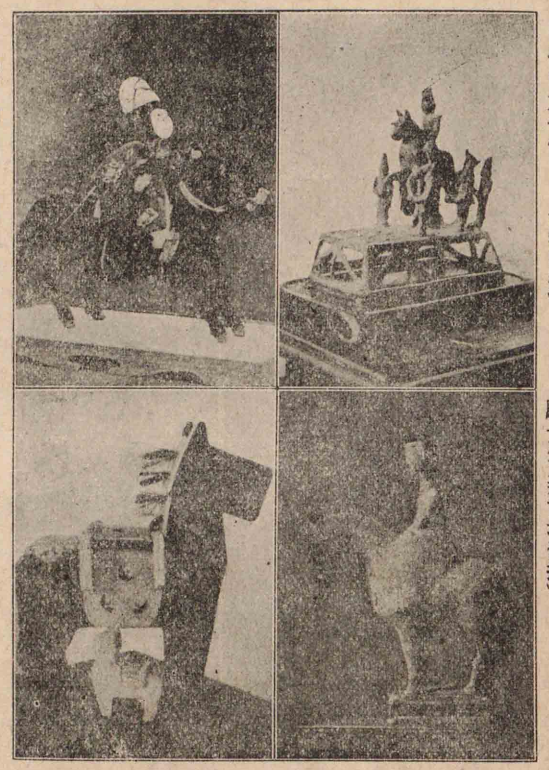
にでも配合して居ます。即ち方向には、木は東、火は南、土は中、金は西、水は北といふやうにこれを配合します。四つしかない方向に五つを當てはめるので、土を中として居るのであります。四季に五行を配合するにも、木は春、火は夏、土は季夏、金は秋、水は冬として居ます。また色に配合して、木は青、火は赤、土は黄、金は白、水は黑とし、その他、味にも五情にも配合して居ます。これらはすべて今日では取るに足らない説と思ひます。（天文學六講による）

一二　馬

巖谷小波

僕は馬を集めて居る。但し生きた馬ではない。およそ馬に縁のある物なら、その形をした玩具、繪畫、置物の類から、馬に使ふ道具、馬から採つた材料で作つた器物、それに馬の圖の附いて居る什器などまで、手當り次第に採集した。それが今では八百八十餘に及んで居る。どうして又僕がそんなに馬を集め出したかといふと、それには二つの理由がある。一つは明三の午歳生まれ、一つは馬が好きだからだ。

明三　明治三年のこと。



騎士（支那古墳發掘）

出城の太子（バルマ古都發掘）

春駒（平賀源内作）

今上陛下御幼時の御玩具

更に又因縁をいふと、僕の父も午の歳なれば、祖母もやはり午の歳。一時は一家に三代揃つて、お馬が三匹ひん〳〵ひんと、いづれも息災を喜んだ位。その祖母には二十年前、父には十年前に別れた僕は、一匹取殘された心

ぼそさ、せめてもの心やりに、この前の午の歳から思ひ立つて、次の午の歳までに集められるだけ馬を集めようとしてゐる。これも一つは二人の菩提の爲と、孝行がつた理窟もつけられる。

そこで、序に、馬についての笑話を、手綱ではない筆の先で、一つこゝへ引き出して見る。

軒譯

近所に一軒の豆腐屋があつた。僕が馬で運動に出るには、どうしてもその前を通らない譯には行かない。ある時、やはり遠乘の歸途に、その前までやつて來ると、ちやうど釜からあげたばかりの豆が、店先で一杯に湯氣を立てて居る。豆は馬の大好物、しかも半日乘り廻されて、腹を減らした折からであるから、僕の馬はどうしてこれを見逃がさう。もう一町ほど辛抱すれば、家で秣を食はせるのに、畜生の淺ましさ、やにはにその豆の桶へと寄つて行く。

桶曳

さうはさせまいと手綱を曳けば、首をこちらへねぢ向けながらも、目を半分白くして、横目で睨んで、そちらへと寄る。僕は力一杯手綱を曳いて、つひに馬をくるりとまはした。所が往來が狹いから、たまらない。馬は後脚でどた〳〵と、忽ち豆腐屋の店頭に踏み

込んで、尻に目の無い悲しさには、とうくその桶を蹴返すと、豆は地上へ、時ならぬ節分。

豆腐屋の女房は驚いて飛び出す。僕は氣の毒でたまらないから、

「大變な事してしまつたねえ。」

といふと、

「いえ、なに、よろしう御座います。」

といひながら、豆を拾ひはじめたが、泥によごれた分だけは、とうくに馬に振舞つてくれた。

過の功名とは馬の方でいふ事。僕はさんぐあやまつた上に、後で豆代を拂はずには置かれなかつた。

一三　奈良の初夏

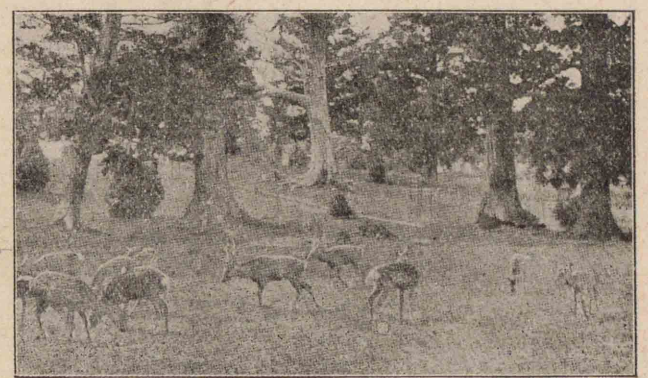
金子薫園

しつとりと曉露に濡れた杉木立の間の通りを、春日の御宮さして二人が行つた時は、まだ薄暗かつた。そこ〻の樹陰に寢てゐた小鹿の群は耳敏くも人間の足音を聞きつけて、起ち上つて、眠さうな眼を此方に向けてゐる怖ぢてゐるやうな彼等は、友が吹く慣れた口笛に安心したらしく、また寢るものもあれば、近寄つて來るものもある。

春日の御宮　奈良市の東端三笠山の麓にあり。官幣大社。

鬱蒼　靄　蔓　濕々　苔

私はふと立止つて、鬱蒼とした老杉の中で特に聳え立つてゐる一樹の高いあたりに、雲のやうな靄の絡はつてゐるのを見上げた。からまつてゐる山藤の太い蔓に、若葉の緑がちら〳〵見えてゐる。花の頃はどんなによかつたらうと思つた。友はと見ると、二三町さきの、一きは木暗い、濕々した、苔の青い石段を上りかけてゐる。小く吹き續けてゐる友の



春日の神鹿

足　貰　黙　柏手　廻廊　翳　巫女　曉　罩

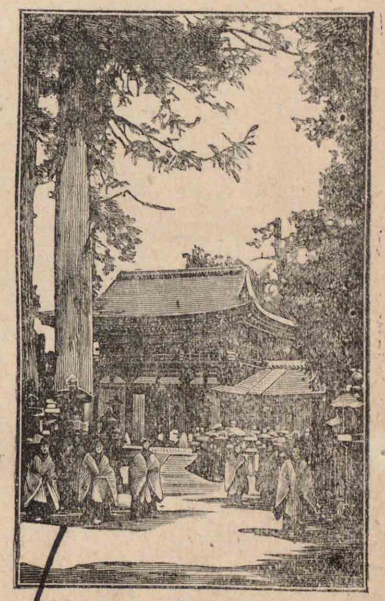
口笛の後から、三正鹿がついて行く。追ひついた私にも同じやうに口笛を吹いて貰ひたいやうな顔つきをして、時々黙つてゐる私を見る。友はぐん〳〵歩いて行く。鹿はやはり後になり先になりして、ついて行く。

春日の御宮に來て、友が柏手を打つ音は、涼しく胸に沁み入るやうである。藤の花の頃、社殿の朱塗の廻廊をめぐる長い花總を思つた。舞扇を翳して、こゝに立つてゐる巫女の姿を想つた。曉の氣がさわ〳〵と御宮の内外を罩めて、林立してゐる杉の樹から、ぽたり

浄衣 觸 埋了 懷 嫩草山

春日山 春日神社の東方に聳ゆ。三笠山はその一部なり。

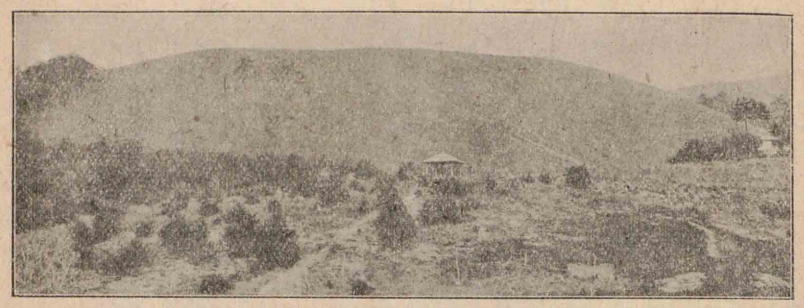
嫩草山 三笠山の北に連なる。



春日神社

春日山の晩春は、滿山藤花で咲き埋めて了ふといふ。三笠山の月も、遠い昔を懷はせる、深いなつかしみがあらう。この二つの山を眺めながら、然う思つて眼を嫩草山に向けた時、今まで曇つてゐた朝空から、朝日が射して、圓い一面の青芝が、てら〳〵滑らかに光つぼたり露が地に落ちる神職達の淨衣を著た姿が目に觸れた。白衣が、處がら、清らかに涼しげに見えた。

柔 暢々 芝 濃 輝 眩 麓 驅 滑



嫩草山

たいかにも平和に滿ちた、柔かな、暢々とした景色である。見てゐる間に、次第に空が青く晴れて來て、山に射す日の色が濃かになつて來る。濃かになればなる程、嫩草山の圓い平和の輝きが加つて來る。眼が眩しくなつて、うつとりする。麓から眺めてゐたのが、自然の興に驅られて、一歩一歩上つて行く。青芝の滑らかなのを踏む毎に、靜

寧な心持がからだ中に満ち渡るのを覚える。上るにつれて風景が展けて、大和の平野が一目に見える。

展

麓で待つてゐる友の口笛が聞えたので、下りて見ると、前の鹿の外に、なほ五六匹集つてゐる。茶店で餌を買つて、それらに分けてゐると、その附近に散らばつてゐたのが、われも〳〵とやつて來た。私達二人は小鹿の群を引きつれて、二月堂から三月堂をおとづれた。途中の雑木の青葉蔭などの静な處で寢てゐた二匹が、目を覺して、私達の一行を、不思議さうに見送つてゐる。

蔭

Saiam
シヤアム

一四　田植始

川上瀧彌

遲羅

遲羅は農業國にして、米はその最も主要なる産物なれば、これに關する祭式多し。田植始の式はその最もおごそかなるものにして、五月の上旬、雨季の初に行はれ、農務大臣、國王に代りて、自ら鋤を執りて土を掘るなり。この日の行列は、いかにも物々しきものにして、供奉の人は、道筋にある商家の品物を、自由に持ち去ることを得る特權あり。

鋤執り

獻上

特權

郊外なる定めの式場に至れば、御名代は獻上の衣三

郊外

垂著
踵踵
膝膝
五穀豊饒
僧侶

著を受け、その一つを取りて身に著くるに、端垂れて踵に達せば、その年は雨量少く、端膝にあらんか、雨量多く、もし踵と膝との中間に垂れんには、諸事中和を得て、五穀豊饒なるべしと信ぜらる。

遅羅の田植

かくて僧侶の讀經終れば、御名代は草花にて美しく飾りたる牛に鋤を曳かせ、四人の宮女、これに從ひて

種蒔
播種
牧穫
牡牛
小舍
凶
卜

種蒔をなし、式を終ふ。御名代の退場後、農民は爭うてこの種子を拾ひ取り、普通の種子に交ぜて、これを播く。かくすれば收穫大なりと、信ずるなり。

又御名代は牡牛を曳きて、小舍に連れ行き、各種の農作物の種子を與へて、食はしむ。この時、牛米を取らずして豆を食はば、その年は豆豊作にして、需用多かるべしといふ。

此の如く、田植始の日は、一年の天候と豊凶とをトする儀式を行ふ日にして、實に遅羅人一年一度の大祭日なり。

化物　鳩　熊

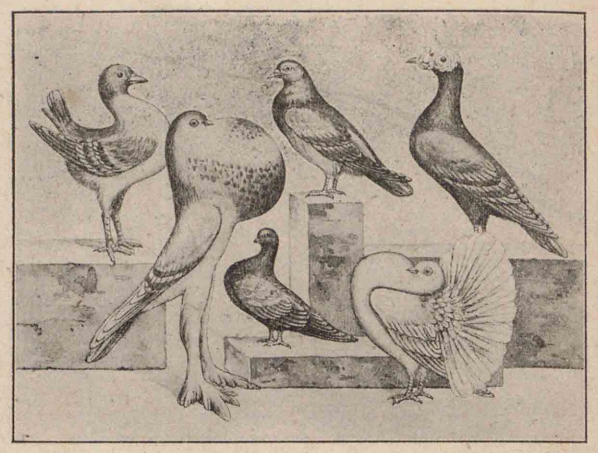
一五　金魚

岸上鎌吉

西洋で愛玩するのは、大抵獸類と鳥類とであるが、東洋には、古くから魚類を愛玩する風習がある。そのために、金魚のやうな、餘程面白いものも出來た。

すべて愛玩する事になると、普通のものでは面白くなく、變りもの、變りものと求める。それで遂には不具のやうなものが生まれて來る。外國の鳩なども、變にひよろ長いのや、胸の飛び出たのや、尾の發達したのや、實に千種萬態で、惡く言へば、化物のやうなものもある。又外國の犬は、形も毛も、非常に種類が多くなつてゐる。

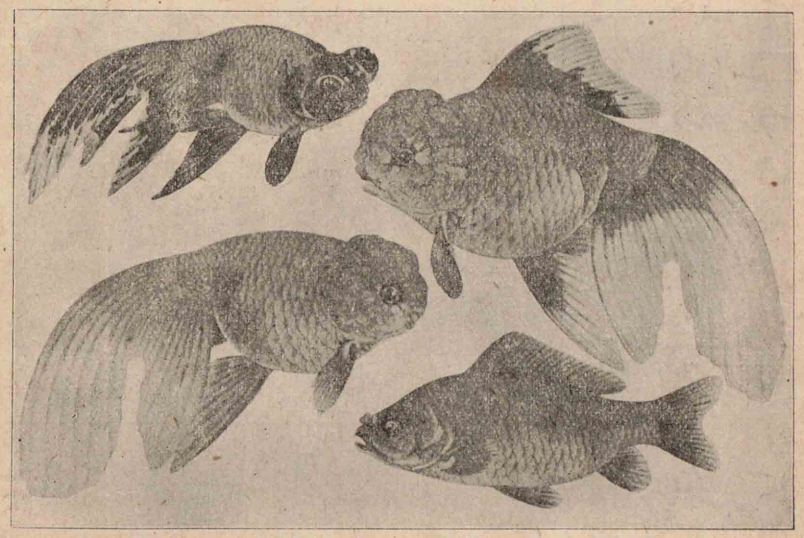
鯖　鮒　付



鳩の種類

わが國の金魚は、どうしてこんな魚が出來たかと思ふ程、不思議なものである。これはもと鮒から變つたので、第一に色が變り、次に鯖が變つた。鯖の違ひ方の殊に著しいものになると、他の魚では一枚であるのが、金魚では二つに割れたやうになつてゐる。尾も下から割れ

肛　蘭　脊　鱗　瘤　澤



金魚の種類

て、扇を開いたやうに變つた。肛門の後の鰭も全く二つに分れてゐるのが多い。蘭蟲などいふ種類になると、脊鰭がなくなり、身體が圓く太り、鱗の數も減り、時によると、頭に圓い瘤のやうなものが澤山出來、實に不思議な形になる。これは金

淘汰　殖

魚の中でも最も形の變つたものである。このやうな變りもののいろ〳〵の種類から、更に新しいものを作つてゆくので、近年になつては益形の變つたものが出來た。その變り方は、幾分か一定の法則によるものであるが、人が淘汰すれば、まだこの後、益變つたものを新しく作ることが出來るのである。

日清戰役の後、支那から輸入した、目の飛び出た金魚なども、珍しいものであるが、これも今は日本に大分殖えた。又これと他のものとから作つたものも、殖えてゐるやうである。目の飛び出たのにも、たゞ横に飛

頂天眼　特殊　趣味　弄

び出たものは澤山あるが、珍しいのになると、頂天眼といつて、横に飛び出た眼のさきの方が、上方に向いてゐるのがある。

金魚は、もと室町時代に、支那から傳へられたものであるが、今日の金魚は支那のとは違ふ。日本で餘程特殊な發達をしたものと思はれる。日本でも東京、大阪、その他の地方地方によつて、金魚の趣味は多少違ふ。自分は、大阪あたりの好みは、古いだけに、見處も進んでゐるかと思ふ。

要するに、金魚は取るに足らぬ、玩弄物のやうなもの

促　馴　映

ではあるが、外國にも輸出してゐるから、この後も良いものが出來れば、益、歡迎されるであらう。極上のものは、親を送るのに面倒であるから、或は卵で持つて行くとかいふやうな良い方法が出來たら、輸出して國益を計ることが出來ようと思ふ。又一方に金魚趣味が發達すれば、他方には、養魚の進歩を多少促すことになつて行く利益があるであらう。

魚などは聲も出さず、馴れもしないやうに思はれるかも知れぬが、その實、魚はよく馴れるものである。人の足音を聞いても、影の映るのを見ても、水面に出て

來る。聲こそ出さぬが、かはゆいものである。

一六　心の修行

村井弦齋

振徴　畢生　腕　揮　刀鍛冶　誇

九十二代

伏見天皇の御代に、日本全國から刀工十八人を選び出して、一振づゝの刀を徴されたことがあつた。その中で第一の選に當つた刀が、天皇の御守刀になるといふので、諸國の名工は皆畢生の腕を揮つて、その刀を鍛へ上げた。

當時日本一の刀鍛冶と、人も許し自らも誇つて居たのは、越中の國松倉の人、郷義弘である。義弘は、當時刀

賄　僥倖　棄　丁度　槌　覗

打つ業では、自分の右に出るものはまづあるまい、自分こそ必ず第一の選に預るに相違ないと、待ち構へて居たが、思の外にも、相州の正宗が第一といふことに定められた。義弘はこれを聞いて、あの正宗は、刀を打つよりも、世わたりの方が上手で、賄でも使つて、こ僥倖の僥倖を得たのであらう。よし、それならば、これから相州にいつて、一刀に斬つて棄てようと、死を決して、越中の國から、はるゞゝ相州鎌倉へ出向いた。

正宗の家に著くと、丁度仕事場に槌の音が聞えたので、義弘は、まづその窓から中の様子を覗つたが、忽ち

玄關　今までの勢何處へやら、しを〳〵として玄關にゆき、わが名を名のつて正宗に面會を求めた。

慇懃　正宗は有名な義弘と聞いて、すぐに迎へ入れた。義弘は、慇懃に初對面の挨拶を述べて、「さて、正宗殿。何を隱隱さう。自分は、今日、貴殿と腕くらべをして、樣子によつたら、貴殿を討ち果す覺悟で參つた。ところが、今よそながら貴殿の仕事ぶりを拜見して、自分の遠く及ばぬことを悟りましたから、懺悔の爲に、御話申す。一體、自分は酒ずきで、仕事場に酒を置くことがあり、暑い時には兩肌脫いで、刀を打つこともあります。今貴殿

懺悔　兩肌脫

の刀を打たれるさまを見ると、わが身のはしたない心掛とは雲泥の相違。仕事場には、神々しく注連繩を張り、隅々まで祓ひ淨め、貴殿も弟子も、折目正しい袴をつけて、威儀堂々と槌を取られる。その眼はすこしも外を視ず、その心はすこしも外に散らず、身も魂もその刀に乘り移るかと思ふばかり。それ程の丹誠を籠めてこそ、天下の名刀も打ち得られることと、感じ入りました。今まで、腕一つで刀打つものと心得て居たのは、愧づかしい。どうか、今から、貴殿の弟子として、心の修行をさせて下され。」と、懇に賴んだ。正宗は謙遜

注連繩　雲泥　祓　淨　袴　魂　籠　謙遜　愧　慇

して、一旦斷つたけれども、たつて望む義弘の熱心に動かされて、遂に弟子にしたといふことである。

一七　米國學生の美風

奥田義人

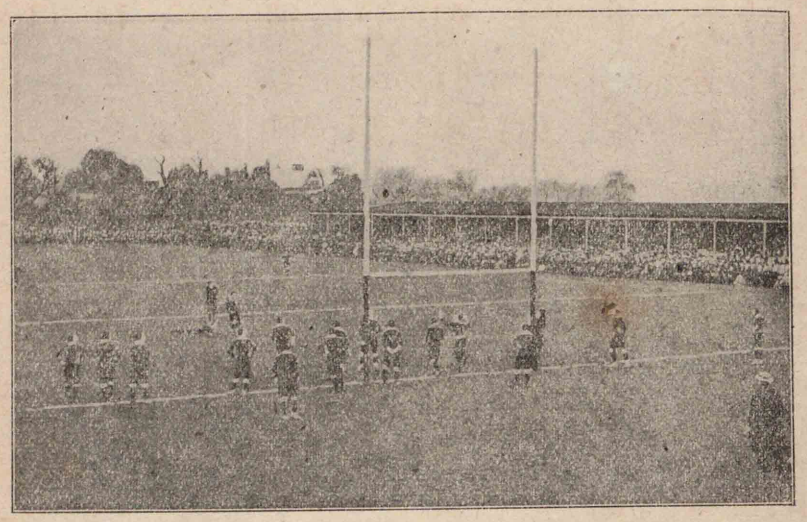
米國學生の氣風の長所は、凡そ二點ある。その第一は彼等が少しも勞働を厭はぬといふ習慣である。かの國の學生は「勞働は神聖なり。」といふ語をよく理會して、中學生から大學生まで、十中八九は、暑中休暇の三四ヶ月を勞働に費して、學資を貯蓄するのである。彼等の從事する勞働には種々あるけれども、中部地方は農業の盛大な地であるから、學生の執る仕事も、主として農業の手傳である。わが國で、苦學生といふ名で勞働して居る學生は、專ら貧乏書生であつて、中等以上の資産家の子弟で勞働するやうなものはないけれども、米國の學生は、富んでゐるものも、貧しいものも、夏期休業を遊び暮すことは、しない。立派な大學の秀才が、しかも富貴の家に生まれながら、夏期休暇を利用して、自力で學資を得るのを大きな誇としてゐるのである。又東部地方の學生には、避暑地で商店の小僧や、ホテルの給仕を勤めたり、行商などを營

んだりするものが多く、中にも身體の强壯なものになると、鐵道工夫となるものさへあつて、父兄も亦これを奬勵（勵カ）するの風がある。

彼等は實に親や先祖の財産に依賴（依賴）することなく、自己の知識と健康と實力とによつて世に處する、獨立獨行の人とならうと、志してゐるのである。殊に貧家の子弟になると、勞働によつて金を貯へて、學業に從事し、金の續く限、孜々（遂）として勉學し、金が盡きればまた勞働に從ひ、わが國の學生のやうに決して功を急ぐことなく、悠々（悠）と目的の遂行に努めるのである。さ

Lei ableif isf helig.
all labowp nobee and boly.
The unite state Amenrcw.

豐頬鐵腕　英氣發刺　憔悴癖



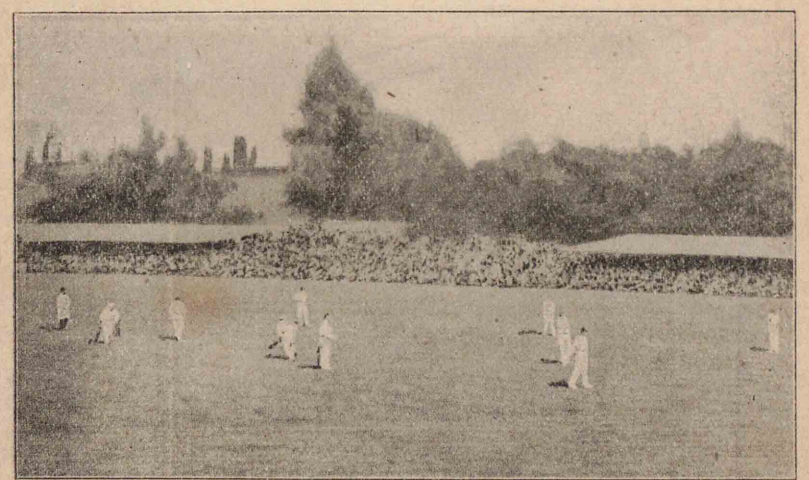
フットボール

うして此等の所謂勞働學生は、九月の新學期になると、續々と都門に押寄せて來る。皆豐頬鐵腕、英氣發刺。憔悴した風姿のものは一人も見られぬといふ。

第二に彼等の美風と稱してよいのは、その運動癖である。元來米國は、野外運動の盛大な點では、英國と竝

Foot Ball.
フットボール
Boot Skating
ボート スケーティング

悉

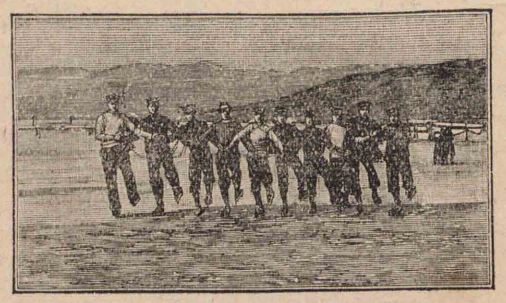


んで、世界に冠たるの觀がある。さうして英國の國民的遊戯がボートとクリッケットとであるに對して、米國の國民的遊戯はフットボールとベースボールとである。殊にエール大學とハーバード大學との對校野球競技の時などは、幾十といふ列車が皆悉く應援軍に

Walk Wele Cricket
クリケット
Play Well. Base Ball ベースボール
ヨクマナビ ヨクアソブ

閑却 軀 沓

占領せられ、道々には自動車の往來が織るやうで、市中はそのために雜沓を極めるといふ話である。その他ボート、テニス、クリッケットなども、盛に行はれるが、冬期に湖水、河川などが氷結するやうになると、スケーチングが流行して、男女の別なく、寒風にさらされながら、體軀を練るに努めるといふ。志かも彼等は運動のために勉學を閑却するやうなことなく、常によく學び、よく遊ぶ。」といふ精神を持つて、心身兩



諏訪湖上のスケーチング

鍛錬　忽

面の鍛錬を忽せにしないのである。かやうに米國學生の美點は勞働を貴び、野外運動を好む氣風に存するのである。

一八　海水浴に友を招く

大町桂月

春風兄足下

潮音　嗚呼　濱邊　松籟

僕此の地に暑を避けてより、兄を思ふこと日に切なり。嗚呼此の清き濱邊、千里の清風に浮世の夏を忘れ、窓におとづるゝ潮音、松籟に天樂を聞く心地して、いとゞ樂しきにつけ、愈戀しきは兄

戀　皎々　功能　蒲柳　邪　擲　遣

なり。潑剌たる鮮魚、兄と共に食ひてこそ味はあれ。皎々たる明月も、獨り眺めては光なし。僕今更海水浴の功能を說かざるべし。唯兄蒲柳の質、冬間風邪にかゝりがちなるが氣づかひなり。萬事を擲つて早く來り給はずや。數日來拾ひ集めたる貝殼や小石、小包郵便にて送り申す。僕の大好きな三郎君に遣つてくれ給へ。

返事

秋水兄足下

忍　碎磯　逍遥　留　貴翰　倚　樓　欄　惠贈　貝殼

兄が厚き情の言葉、都の夏に苦しめる僕の身には、清風吹き來れる心地す。僕の魂は、疾くに兄と共に、暴浪碎くる磯邊に逍遥すれど、唯家事上の都合を慮りて、忍びて家に留りしなり。貴翰を父に見せしに、早速行けとの一言。僕雀躍して足の踏むを覺えず。感謝す。兄の賜やまた大なるかな。明朝一番汽車にて程に上らん。小包未だ屆かず。思ふに海角の樓上、兄の手を執り、欄に倚りて暮雲に對するの時は、小弟が兄の惠贈の貝殼を弄びて、兄と僕とを思ふの時なるべし。

篇　卑見　不審　廉

嗜好

一九　文を學ぶ人に

大町桂月

この間御送になりし美文三篇、卑見を加へて御返し申候間、御一覽の上、御不審の廉もあらば、御尋下されたく候。今度は「都の友に」、「鄕里の友に」、「旅中より友に」の三題にて書翰文を作られんことを希望致候。それについて小生の意見を申上ぐべく候。

この頃の青年にて文學の嗜好あるものには、歌を作るもあり、新體詩を作るもあり、小說を作る

章　稽古　濟

もあれど、書翰文を上手に書くものは至つて少きやうに見受け申候。文章の必要なることは、今更申すまでもなく候へども、その文章の中にて最も必要にして、何人も稽古せざるべからざるものは、書翰文に候。然るに議論文は書けても書翰文が書けず、美文は出來ても書翰文が出來ざるやうにては、文を學びたるかひなきことかと存ぜられ候。

元來、書翰は意を達するのみにては濟み申さず、禮を失はぬに始りて、人を動かすに終ることと

痒　竟

存じ申候。中學を卒業したる人達ならば、意の達せぬことはなけれど、失禮になることを言うたり、失禮にならずとも、感情を惡くするやうなることを言うたり、意は通じても、痒い處に手のとどかぬやうなる言ひ方をしたりして、人を動かすどころにてはなく、人を面白がらせることも出來ぬ人が多きやうに候。これ畢竟ずるに、平生美文などは作つても、書翰を練習せざる故に候。この點を以て先第一に書翰文に熟達せられんことを希望致候。

二〇　富士登山その一

藤岡東圃

脚絆
草鞋
誘
今年もまた富士山に登らんと、急に思ひ立ちて、つれをも誘はず、脚絆、草鞋の裝に身も輕々と、朝早く飯田町の停車場に到る。

飯田町 東京市麴町區にあり。中央本線の汽車運轉の終點驛。

武藏の平野を走れる汽車は、八王子を越えて、漸う山間に入り、西へ西へと進みて甲府の方へ向かふ。有名なる猿橋を過ぎ、正午頃、大月にて吾は汽車を下りぬ。

漸
猿
照

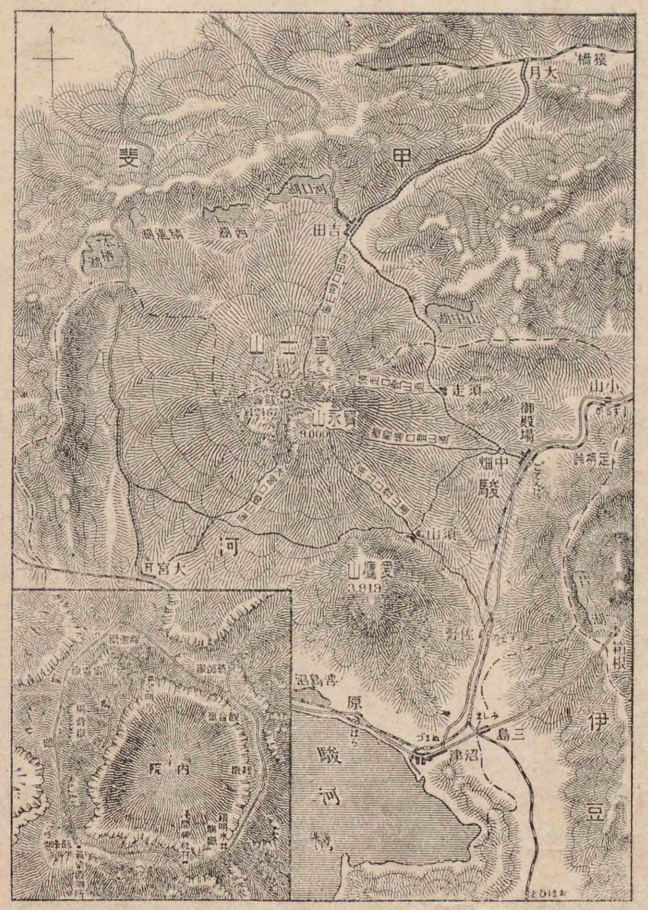
八王子 東京府八王子市。

馬車はあれど乘らず、八月半ば、照りつくる日に土も石も燒くるやうなる道を、何のそのと急ぐ。富士見平に至れば、富士の姿の遠く吾を招くが如く見ゆるに、益勇み立ち、行き〳〵て日暮に吉田に著く。大月よりこゝまで凡そ六里。

そも〳〵富士山は、望みても知らるゝとほり、なだらかなる山なれば、いづれの方面にも登山口あり。東は須走及び中畑に、南は須山に、西は大宮にありて、これらはいづれも駿河に屬し、北は甲斐の吉田にあり。各道とも、麓より絶頂までを十合に分つ。一合の間、距離の長短同じからず。途中特に合の界に室を設けて、登山の人の休泊所とす。毎年、太陰曆の六月一日に山を

駿河
麓
絶頂
距離

開き、太陽暦の八月三十一日に閉づる定めなり。諸道のうちには、北口の設備最も整へりといふ。昨年わが登りしは東の須走口なれば、今年は途を變へて、この口を取りたるなり。



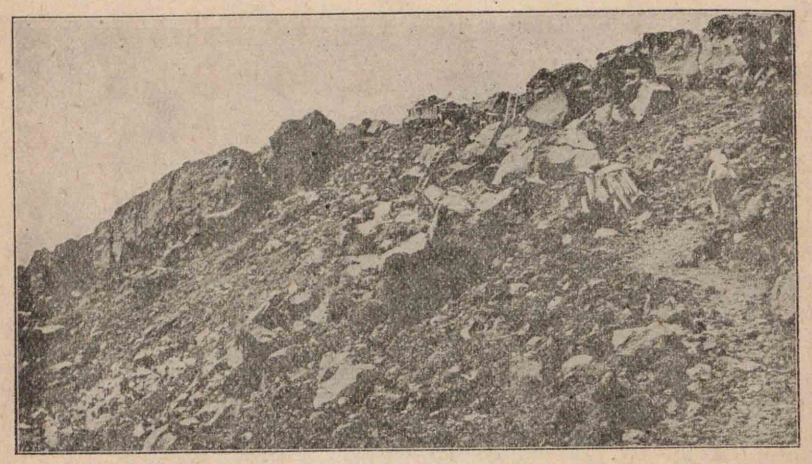
吉田にて一泊し、同宿の客三人と共に、強力一人を雇ひ置けり。翌朝まだ眞暗なるうちに起き、強力に布子、餅などを擔はせ、吾等は金剛杖をつきたるばかりにて出づ。まづ町はづれの淺間神社に詣づ。この祠のうしろより、途は裾野にかゝる。夜の明くるに隨ひて、百合、女郎花の花もあざやかに、鶯、雲雀の囀るも聞ゆるに、朝露に濡れつゝ進む心地、すがくし。馬返しを過ぐれど、まだ山に登るとも思はれぬ程なり。いつしか樅、檜、途を夾みて生ひ茂り、常の山路に異ならず。富士山は俗に草山三里、木山三里、禿山三里と

梯勾　隈　六根清浄唱

里十里もありといへど、實際はその半なり。

いへるが、木山の五合目あたりまで續けるは、吉田口に限り、他の口は大抵二三合目までなりといふ。五合目あたりよりは、木もなく、草も稀に、燒石、燒土ばかりにして、山陰には雪の殘れるところもあり。登るに隨ひて勾配の急になると共に、眺望もよくなり、高かりし四方の山は一足毎に低くなりまさる。七合目を過ぎては、一歩は一歩より險しければ、杖を力に、岩にすがりて登るに、息も切れんとす。かゝる險路を、老いたる一群の道者が、「六根清浄」と唱へつゝ平氣に登り行くは、驚くべし。

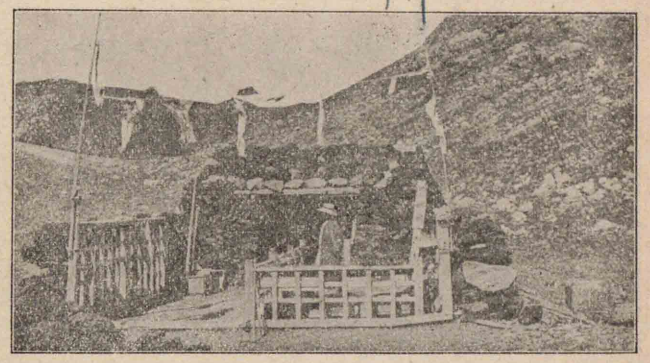
擂鉢
噴火口跡周回
千秋
藏



富士山頂

八合目にて、途は須走より登る途と合す。こゝに大いなる石室あれば、吾等もこの室に泊ることと定む。されど日なほ高ければ、頂上を見て來んとて、苦しき息をつきつゝ登る。頂上には擂鉢の形したる噴火口の跡あり、周囲凡そ十五六町。中には千秋の雪を藏めたり。これを周りて八峰あ

就中劍ヶ峰
祀
観測所
巡
鉢
泉



金明水

銀明水

り。就中劍ヶ峰最も高くして、ここに淺間の奥宮あり。木花咲耶姫を祀れり。また觀測所あり。噴火口の外圍を巡るを御鉢めぐりといふ。その途中少し降りたる所に、金明水、銀明水の二泉あり。

踏
足柄
愛鷹
椀伏
本栖
恰
擴

二一　富士登山　その二

今しも吾は日本一の高き處にあり、五千萬人の上に立つてどうぐゝと足踏みならす心地よさよ。箱根、足柄、愛鷹等の山々は椀を伏せたる如く、山中、河口、本栖等の湖は杯水の如し。綿のやうなる雲折々その上を舞ひ渡る。眼下の山海は、近しといはんか、遙なりといはんか、恰も盆石を飾れる如く、また地圖を擴げたる如し。天氣のよき爲に、三浦半島あたりの海上に富士山の影は映れり。これは御影と稱して、稀に見らるゝ

近年この八合目にはやゝ宿屋らしきものも出來たり。

爐　焚火　稀薄　唇　醉惱　疲

ものなりといふ。吾等の影も山の影と共に、かの海上にあるべし。

さて八合目の室に歸りて、宿る。室は太き木を骨組にし、石にて疊み、廣さ二十疊ばかり、すべて板敷にて、中央に爐を切りたり。細き燈火一つともし、焚火の煙室内に滿ちて、まことに太古の生活もかくやと想はる。空氣の稀薄なるがために、人々の顔は黃に、唇は紫に見え、中には山醉にかゝりて惱めるもあり。これ登山者の特に注意すべきことにて、はじめ途の安きを侮りて、急ぎ登るものは、早く疲れて、これにかゝり易し

纏　瞬　暫　喫　伴　只

といふ。

布子を纏ひ、同伴の人々と共に一枚の蒲團を著て寢たるが、寒氣强くして、よくも寢られず。翌朝、日の出を見んとて、早く起きて戸外に出づ。天は淸く晴れたれども、脚下は一面の雲の海なり。薄黑き雲はやがて白くなり、ついで赤くなり、さて一瞬、朱盆の如き日は昇りぬ。昇ること暫くにして、金光八方に散じ、天地全く明なり。

室に歸りて朝飯を喫し、吉田より同伴したる人々に別れて、只一人中畑口に向かふ。降路は砂走とて、砂の

滑　憾

上を降るに、滑るが如くにして、止る所を知らず。わけてこの口は砂走の間長くして、七合目より三合目までは、息をもつがず、落つるやうに降り、その間に四足の草鞋を破れり。暫くのうちに砂走も過ぎて、樹木の茂れる途に入り、裾野を通りて、中畑に著きしは、朝の八時過なり。登るには十餘時間を費し、降るには二三時間にて足る。下山の面白さこれにても察すべし。昨年は山上にて暴風雨にあひ、室の中にて二日を過し、景色も眺められず、逃ぐるやうにして降りしに、この度は稀なる好天氣にて、前の憾もはれたり。御殿場

大森　東京市の南方約二里にあり。

大井、鈴ヶ森　共に大森より東京に至る街道にあり。

趣　鄙

に著きて顧れば、富士山はほゝ笑みて吾を送るが如し。日高きうちに東京に著きぬ。

二二　田園の夏

杉村楚人冠

家を大森の片ほとりに移してより、こゝに一年。その間にかはり行くをりく〳〵の鄙の趣、中にも夏ばかりめでたきはなし。

朝はまだきに起き出づ。風涼しく、氣清ければ、自轉車に打乘りて、大井、鈴ヶ森の邊を走る。行人稀にして、舞ひのぼる塵もなし。曉風身に沁みて、夏の半ばなるを覺

番巾　八幡の濱　大森の東方海岸。　澄　晏　繰　朝餐　卓　婢　膳羞　須　茄子　淺漬　煮

えず。日うらゝかなる時は、露けき野草踏みしだきて、行きて潮を八幡の濱に浴ぶ。朝は水澄みたれば、底の眞砂も數へつべし。鏡の如き海づらを彼方此方泳ぎまはりて、汀に歸れば、水樓、人晏くして、雨戸繰る音始めて聞ゆ。

歸りて朝餐したゝむるに、必ずしも膳羞を須ゐず。紫深き茄子の淺漬に、番茶の煮ばなの香いと高きを愛すべし。食卓を圍むもの、母と妻と二兒と、伊豆より來れる少婢と、これに某生とわれとを加へて、合はせて七人なり。某生は、夏季休業中、來りて我が家に宿れる

Hammock

素小跣足　暇　賑　欅　徐

なり。

時あまりあれば、更に冷水に浴し、さては素跣足にて裏の瓜畑に水を注ぐ。さるべき暇なき時は、白麻の衣輕く著なして、直ちに東京に向かふ。汽車を待合はする人々、大森停車場のプラットフォームに賑はし。知る、知らぬ、互に目禮して、昨夜は暑かりきなど語り合ふ。流石に都離れたる樣をかし。

晝少し過ぎて家に歸る。さと水を浴びて後、午餐の膳に就く。ぱてて、清風徐ろに至る處、庭の欅（ケヤキ）の影濃かなる處、遙に沖なる白帆のゆきかふを眺めて、いつとは

夢促射的場疲偶澁喉饗頬儀薯

なく夢に入る。覺めて後、日なほ高ければ、某生を促して海に入り、或は潮を浴び、或は貝を拾ふ。さては射的場の裏なる松林に入りて、蟬聲雨の如きを聞きつゝ休らふ。

偶〻都より友の訪ひ來るあれば、共に舟を儀うて灣内を漕ぎ、疲れて握飯を頬ばり、澁茶に喉をうるほす。その快如何ばかりぞや。歸りて、拾へる貝の汁をとゝのへて、もてなす。朝のうちに來べき八百屋の來ぬ折は、裏の手作の薯を煑て、客に饗すべし。

家の裏に十歩ばかりの空地あり。夏至れば、自然薯の

薯蔓楓裸屈穴泥汗撒垢嬉缺

蔓生ひて、櫻の枝にわたり、楓の幹にかゝる。天僅に曇りて、暑さやゝ輕き時は、某生と共に裸になりて、これを掘る。掘り〳〵て手も屈きかぬるに至れば、大地に横たはりて、半ば頭を穴に埋めて、掘り進む。二尺ばかりなるもの二つを得れば、一家の料にあつべし。乃ち泥まみれのまゝ海に出でて、洗ひ來る。歸れば薯汁既に成りて、吾を待てり。

水を門の内外に撒き、一浴して都の塵と垢と汗とを洗ひたる後、夕餐の膳に就く。朝餐に列なりたる人の、一人も缺けず、一日の務を終へて集りたる、嬉しから

鮮　畔　琴　梢

ずとせず。

日暮れなんとするに、風ます〳〵涼しく、氣いよ〳〵清し。東の障子明け放ちたるところより見下せば、青青したる稻田のあなた、暮れ行く鈴ヶ森、八幡の濱の家家を隔てて、白帆漸く消え、漁火次第に鮮なり。幼きものは、少婢に伴なはれて、畔道にさまよひ出でぬ。母と妻とは八雲琴などおぼつかなげにかきならす。われは庭の大樹にハンモック懸けわたして、のけざまに臥しつゝ、緣に出でたる某生と語る。仰ぎ見れば、星光いよいよ明に、樹梢をそよぎわたる風の音高し。垣を隔

疎　掠　杜鵑　蒸　蛾　金亀子　蟬　蜻蛉　窃

てて、往きかふ村人の取りつくろはぬざれ言、手に取る如く聞ゆ。

夜更けぬれば、人聲やう〳〵疎なり。時には山王の杜のあたりを掠めて杜鵑の啼くを聞く。臥床に入りやせん、入らずやあらんなど打案じつゝ、書を讀むに、燈火を慕うて飛び來る蟲の數々、一に蛾、二に金龜子、三に蟬、四に蜻蛉、その外は名を知らず。

月出でたる、またなく嬉し。きら〳〵と水に映りて、水際の松林を離れゆくさまのをかしきに、窃に門を開きて、あこがれ出づれば、同じ思の人のありてや、月下

鐘　薄鷄

に横笛を吹きすさぶなど聞ゆ。

二三　野寺の鐘

文學博士　佐々木信綱

野寺の鐘に送られて、
夕日は森に沈みゆく。
名殘の雲のくれなゐも、
見る〳〵薄くうすれゆく。

鷄、鳥屋の中に入り、
里の子、家に歸りたり。

夕餉　靡　伏屋　遇

竹村がくれ夕餉たく
煙ぞ、靡く、こゝかしこ。

靜けき村の夕暮や。
安けき村のゆふぐれや。
よそめいぶせき伏屋にも、
樂しき聲のみちく〳〵て。

二四　奇遇　その一

櫻井忠溫

日露戰役の始る少し前の事である。余の勤務して居

迫節

淳朴
珠數
掌婆
賽

た四國の聯隊では、戰時編制の一箇大隊をこしらへて、伊豫の宇和島へ行軍したことがある。行き過ぎる村々の人たちは、戰爭の迫つて居る時ではあるし、殆ど村中總出で、路の兩側に立ち列んで、非常に歡迎してくれた。

此の地方の人は、至つて淳朴で、中には珠數を懸けて合掌し、涙を兩眼に浮かべて居る老婆もある。路傍に正坐して、伏拜んで居る爺もある。賽錢を投げたり、米を撒いたりする人さへあつた。こんな誠心からの歡迎を受けて、余等は一種口に言へない感に打たれた。

溜還語

兵士の中には、涙を一杯目に溜めて、

「おれはもう死ぬ。どの面さげて生きて還れるものか。」

と、感極つて私語くものもあつた。

或村落に著いたのは、もはや夕風の寒い日暮であつた。余等は此處で暫時休憩して、やがて出發して、村はづれに行くと、多勢の兒童が教師に引率せられて、夕風の寒い冬空に、行儀よく整列して、歡迎して居た。其の前を通る時、ふと見ると、兒童の中に十四五歳と見える、かはゆらしい一女生があつて、左の手に從軍記

捧　傾　怪　駐

章を捧げて居る。はて不思議と、余は首を傾けた。
怪しんだのは、余一人ではなかつた。大隊長森少佐は、
馬を駐め、教師を手招して、
「一體、この娘はどうしたのです。」
と聞かれた。教師は慇懃に答へて、

慇懃

「此の兒は、此の村の某といふ者の娘です。父は日清
戰役に出征して、平壤の戰で戰死しました。此の娘
は其の時僅に四歳で、それからは母の手一つに育
てられ、今は高等小學の二年生であります。實は今
朝私の處へ來まして、

緒　貰

「今日は兵隊さんを迎へに、御父様の從軍記章を
持つて行きたいと思ひますが、宜しう御座いま
すか。」
と聞きますから、
「どうしたわけか。」
と問ひ返しますと、娘は泣きながら、
「此の記章は御父様の大切な記念でありますか
ら、之を持つて行つて、どうか御父様の分の歡迎
も一緒に致したう御座います。」
と申しましたので、私も思はず貰泣をして、快く許

したのであります。」

と言つた。

二五　奇遇その二

鬼怖俄顫

並み居る一同は、此のいぢらしい娘の顔を見、其の心根を思うて、涙ぐまない者はなかつた。森大隊長は手綱を固く握りしめたまゝ、うなだれて、鬼をも怖れぬ武士の眼にも涙を浮かべ、男泣に泣いて居られる。と見る内に、俄に馬から飛び降りて、此の娘をひしと抱き上げ、體を顫はせながら、低いけれど聲を立てて泣

Landberchilb.

喫驚　彼徐　拭　吾輩　敢　平壤　哀

かれた。

是はあまりに意外であつた。余等は少からず喫驚して、どうした事かと見て居ると、其の内に少佐は徐かに娘を下して、ほろ〳〵と落ちる涙をハンケチで拭きながら、

「一同聞いてくれ。不思議な事もあるものぢや。日清戰役の折、吾輩の部下に某といふ勇敢な伍長が居つた。其の某は吾輩と一緒に出征したが、殘念にも平壤の戰でとう〳〵戰死した。其の戰死の花々しかつただけ、哀も一層深かつたが、今聞いてみると、

此の娘は其の伍長の子だといふ。吾輩はもう何とも言へぬ。今日此の娘を見ると、此の從軍記章が妙に氣に懸るので、聞いてみると、思ひがけなくも嘗て吾輩の部下にあつて、花々しい戰死をした伍長の遺兒だといふ。實に不思議な緣である。」

と、かう言つて、少佐は又一しきり涙にくれられたが、やがて涙をふいて、

「大分時間も經つたやうぢや。名殘は惜しいが、職務は棄てられぬ。行かう。」

と言つて、固く娘の手を握り、別れを告げて、決然と馬に飛び乘られた。余も同じく隊を率ゐて發足した。

やがて村を離れたが、娘は泣き脹した眼を一杯に見張り、別れたうもなささうに、何時までも〳〵後を見送つて居た。薄れ行く夕日の影を浴びて立つた娘の、いぢらしい姿は、今も此の事を想ひ出すと、眼先にちらちらするやうである。

二六　任務

義のためにその愛兒を犧牲にしたブルツスの壯烈にも劣らない事實は、今回の戰場で屢起つた。これも

ブルツス　上古ローマ王政時代の人。

509. B. C.

Lucius Junius Brutus

Consul

その一つである。

時は千九百十四年八月。一隊の砲兵を指揮して居つたフォルク砲兵大佐は、或重要な、しかも最も危險な任務を遂行する必要が起つた。これがためには、どうしても部下の數名の士卒と一人の將校とが死地に就かねばならぬのである。忽ち若干の將卒は爭うて決死隊編入を志願して出た。これらの敢死の將校中に、己れの實子の中尉ヴァンサン＝フォルクが居るのに、大佐は、ふと氣がついた。

「いかぬ。貴樣などは。」

Tarquinus

Titus Tiberus

嚴　溺　苟　卑怯　尤　緒

と、大佐は思はず叫んだ。

「何故でありますか。」

と、嚴としていつたその聲に、大佐ははつと我に歸つた。親身の愛に溺れ、その子の切願を却けて、他人を死地に送ることは、苟も一隊の長として、實に卑怯である。未練である。そも〳〵一隊の士氣に關する一大事である。然し彼とても亦人の父である。

「ヴァンサン」

と、喉で叫んだ彼の心緒が多少亂れたのも、尤もであつた。

フォンテンブロー　フランス共和國パリーの南東三十七哩にある一都會。

剛　評判　否　確

然しフォルク中尉は少しも動かなかつた。フォンテンブローの實科學校を首席で出たこの青年士官は、沈著と剛勇とで評判を取つて居た。斷乎とした父の決心の色を見た彼は、益勇み立つた。嗚呼、この子こそ、實に大佐の欲して居た適任者ではないか。大佐は誇るに足るその子に恥ぢるやうな父であつたであらうか。否、大佐の決心は固かつた。

「予はフォルク中尉に本隊の指揮を命ずる。終り。」

少壯士官は明快に答へた。

「大佐殿。確に承知致しました。」

水戸黄門　徳川光圀。

男爵　禪　匿　狼狽

任務は完全に果された。大佐の目的は十分に達した。然し、フォルク中尉は再び歸つて來なかつた。

（時局に關する教育資料）

二七　得道

上書イテル

文學博士　男爵

細川潤次郎

水戸黄門、歸化僧心越禪師の事を聞き及ばれ、相見んとして、之を召されたり。黄門は心越の人と爲りを試んがため、障子の外に鐵砲の技心得たるものを匿し置き、黄門の咳を合圖に點火すべきやう、用意せしめたり。其の砲聲に心越が狼狽するかせぬかを見て、得

般若湯
島
瀝

道の淺深を測り知るためなるべし。

さて黄門と心越と、席を隔てて、座定まり、寒温の挨拶もをはり、般若湯を賜ふとて、杯を心越の前に置き、扈從の士、十分に注ぎたるを、心越手に取り、二口三口ばかり飲みたる頃、黄門の咳と共に一發の砲聲耳を貫く。心越さあらぬ體にて一杯を飲み盡くし、餘瀝をも乾かし、其の杯を黄門に上

水戸黄門

喝
覆
宗
Propeller（推進機）
屈プロペラー
響音

る。黄門其の酒を二口三口飲みたる頃、心越一聲大喝す。黄門覺えず打驚きて、其の酒を覆したり。

これより黄門、心越の得道に感じて、歸依の念を生じ、宗要を問ふこととなれり。

二八　空中の接戰

プロペラーの響が高く聞えた。佛軍の陣地の上に、空高く飛んでゐるのは、獨逸軍の飛行機である。銃丸の屈かぬ高さである。

と見ると、一臺の飛行機は佛軍の陣地から飛びあが

つた。獨逸軍の飛行機はこれを見て、上から攻擊しようと試た。銃聲が聞える。併し效果はなかつた。佛軍の飛行機は廣大な半圓を畫がきながら、次第に上へ上へとあがつて行く。獨逸軍の飛行機は俄に下りて來る。あとは、目もくるめくばかりの一高一低。

空中の接戰

銃聲。

此方は彼方よりも上へ、彼方は此方よ

りも上へ昇らうと競ふ。今は二つとも、遙な上空に大きな鳥が鬪うてゐるやうに見える。かすかに銃聲が聞える。上になり下になり爭つてゐるのが見える。二機は近づいてはまた遠ざかる。

忽ち佛軍の飛行機は上へ飛びあがる。獨逸軍の飛行機はゆら〳〵として、ぐる〳〵めぐる。稍暫く銃聲が聞える。獨逸軍の飛行機から黑煙がむら〳〵と立つと見る間に、その機はさつと地上に落ちた。燒けこげて、元の姿はなくなつてゐる。佛軍飛行機の銃丸が敵機の發動機に命中したのであつた。（時局に關する教育資料による）

畔　圖　捲　蓆

二九　馬の看護

澁川玄耳

洪水は退いて、僅に一條の細流が殘つてゐる。廣い河原にたゞ砂が白い。河畔に數株の柳がある。其の蔭が師團大行李の馬繫場になつてゐる。予が宿舍の近所である。

或日の午後、此の馬繫場の傍を散歩してゐる中、圖らず異樣な光景を見た。一人の兵卒が砂上に坐してゐる。彼は一枝の柳を手にして、それを打振つてゐる。兵士の前には、馬が横たはつてゐる。馬には蓆を捲いて

枕　携帶天幕　掩　零　疑　蠅　訊　補充

枕にさせてある。馬は眼をつぶつてゐる。睡つてゐるのではない。時々くわつと眼を見開くこともある。馬の下には蓆が敷いてある。馬の體には毛布と携帶天幕とが掩うてある。馬の傍には藁や馬糧袋がある。袋から麥が零れて、馬の口元の邊に散らばつてゐる。疑もなく馬は病氣である。兵士はそれを看護して、蠅を拂つてやつてゐるところであるとは思はれたが、予は進み寄つて、どうしたのかと訊ねてみた。兵士の答はかうであつた。

「自分は補充役の未教育兵であつた。此度俄に召集

舩船　怕　膝　泥濘　繰　徹　艱難

せられて入營し、直に戰地に出發した。さうして師團の大行李に附いて、馬を預ることとなつた。自分は元來馬に就いて何等の知識をも有たなかつた。馬は恐ろしい動物とのみ考へてゐた。汽車の中、艀船の中など、狹い處で、馬に附添うてゐたときは、隨分怕い思もした。上陸後、雨天續きで、馬でさへ膝を沒するほどの泥濘の中を、轡にすがつて行軍した。到底行進が出來なくて、篠つく雨の降る中を、路上に立ち盡くして夜を徹したこともあつた。かうして幾十日か艱難を共にする中に、此方が慣れゝば

咬　遣　煩　萊州平度　腹痛

彼方も親しむ。咬まれたり蹴られたりするやうな事もなくなつて、相互の間に一種の友情が生じて來た。

「やつと無事に此處まで來た。もう雨も降るまい。路もぬかるまい。青島へ僅數里となつてゐる。此處まで來れば、もう安心。再び强行軍をする氣遣ひも無い。我々も舍營が出來、糧食も豐になり、酒や煙草の特別支給も屢受けられるやうになつた今日、かはいさうに馬は腹痛が起つたのである。水が中るのならば、萊州や平度にゐる頃に煩はねばならぬ馬

にあり。わが陸軍は大正三年九月二日半島の北岸なる龍口に上陸し萊州を經て、同月十日平度に至れり。

豆粕　兆　簇　撫

糧の故ならば、食ひなれぬ豆粕など與へられた時に、病氣が起りさうなものであつた。時候も故國と格別の變りもない此處にゐて、今頃こんな苦を見るのは、何といふ不運な馬であらう。獸醫も深切に屢來て診て下さる。藥も無論飲ませてあるが、一向回復の兆はなく、日に增し弱つて、此の通りの有樣、一に看病といふから、自分の出來るだけの事はしてやらうと思つて……。」

かう語りながら、輸卒は柳の枝を措いて、氣遣はしげに馬の頭を撫でる。蠅は簇つて來るが、馬は耳も動かさぬ。到底助りさうにもない。

明治四十四年十月七日のこと

猿島　蘭領ボルネオにあり。

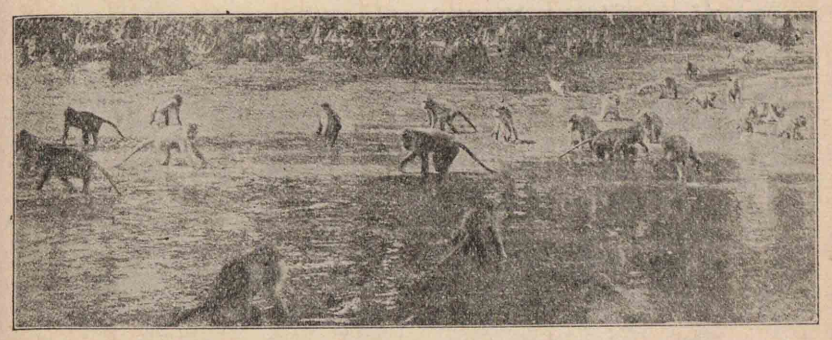
麵包　澤瀉　水際　喬

三〇　猿島

川上瀧彌

一日、小舟を雇ひて、猿島見に行く。朝八時、猿へのみやげにバナヽ、麵包など、數多く買ひ込み、支流を上りて大川に出づ。川の名はマモンタンなり。幅は二浬にも餘り、兩岸には森林茂りて、水の滑らかなること、油の如く、舟の影さへ多からず。

九時、中流の樹木繁れる小島に近づく。紅樹の一種の、遠く見れば柳の如き喬木、枝を交へ、水際には澤瀉に



猿島

似たる水草茂り、島の内部には、さがり花の種類、藪をなせり。一疋の小猿、喬木の枝を傳へるが、吾が舟を見て、次第に枝より枝へと下り來る。と見る間に、何處よりか出で來たりけん、二疋、三疋、四疋、五疋の猿ども、岸邊に下り立ちて、吾が舟に思ふうち、島の中程に到り著けを逐うて走り來るに、興あることば、一隻の小舟、土地の女兒どもを

四阿　跳　齊　舟緣　搔　奪　喧嘩　煩

乘せたるが、既にありて、見よ、幾十幾百の大小樣々の猿群り集りて、投げ與ふる食物を爭ひつゝあり。

水中には、小き屋根ある四阿めきたるもの立ち、その柱にも十幾疋の猿ありて、手にせる食物を食へるが、吾が舟の近づくと見るや、先を爭うて舟に跳び移り來る。陸上の猿の群もこれを見て、一齊に水に跳び込み、舟緣に搔き上りて、あなやと見る間に、食物の大半を奪ひ去れり。食を爭ふ喧嘩いと騷がしく、その奇觀なかく の見ものなり。試に食物を水中に投ずれば、猿は泳ぎつきて、これを爭ひ、得たるものは急ぎて頰

狙仙の態

狙仙　森氏、大阪の畫家、猿を描くに長ぜり。約百二十年前の人。

ばり、或は樹上に逃げ行く。これを追ふものあり、取られじと、なほ樹上高く逃げ登るものあり、枝より枝に跳び廻るものあり、伏し木を傳うて走り去るものあり。實に猿の生活狀態は一目に見るべく、狙仙をしてこれを見しめば、世界を驚かすべき名畫を成さんものをなど、思へり。

猿　森狙仙筆

飽迷信

かくするうちに、一行の一人は、この景色をレンズのものとなせり。飽かぬながめを見殘して、歸りを急ぐ途すがら、紅樹の枝を折り取りたるに、樹上の小猿二疋、吾が舟に跳び移りて、殘れる食物を取り、急ぎて頻ばる。その間に舟は早くも岸を離れたれば、猿の一疋は遙なる枝を目がけて跳び附きしかど、他の一疋は逃げおくれて、舟の屋根にうろつきまはる。舟は次第に沖へ出づるに、猿はたまらず水中に跳び込み、一度は沈みたれど、遂に遙なる岸邊に浮かび出でたり。この島にては猿の捕獲を嚴禁し、土人の迷信より時

蘭　時、食物を携へ來てはこれに與へ、また見物客の食物を與ふるより、今は馴れて、舟の影だに見れば、幾百の猿群集し來るなりと。或時一人の和蘭人、誤りて猿を殺したるに、家に歸れば、間もなく發熱して、死したることあり。この猿を殺せば必ず祟ありなど、土人の間に傳說あり。珍しき見ものの一つといふべし。

祟

疎遠

袂

三一　寫眞を請ふ

拜啓。分袂以來、意外の御疎遠、何とも申譯これなく、平に御海容下されたく候。御存じの通り、片田舍に引籠り候うては、友とすべきものは、たゞ山の端の月と松吹く風とのみにこれあり、淋しさに在京當時のことども偲ばれて、貴兄の御上忘るゝ暇も御座なく候。就いては誠に無心の至に候へども、近頃御撮影の御寫眞一葉御惠下されたく、朝夕拜し候へば、わびしき只今の生活も慰められ、たよりなく感ぜられ候身も、大いに力强く覺ゆることと存じ候。何とぞ御憐察の上、御快諾なし下され候やう御願申上候。敬具。

籠　淋　暇　偲　撮影　惠　只　憐　諾

返事

久しく拜顔を得ず、御起居如何と存じ居り候處、圖らずも懷しき御書面に接し、恰も御目にかゝりたる心地致され申候。御申聞の寫眞、差上ぐべきものにはこれなく候へども、他の人とは異なり、多年辛苦を共にし歡樂を同じうしたる、いはば骨肉の如き貴契に御座候へば、仰せに從ひ、只今別便にて郵送致候。御覽の上御一笑下さるべく候。就いては貴契の御寫眞も何とぞ一葉賜はりたく、永く記念として御身の上しのび申すべく候。此段偏に願上候。餘事は後便にと、わざと書き殘し候。拜復。（新體書翰による）

偏詠　萩　袴　芽

三二　秋の七草

松村任三

萬葉集に、山上憶良、秋の野の花を詠める歌、

秋の野に咲きたる花をおよびをりかきかぞふれば、七種の花。

萩が花、尾花、くず花、なでしこの花、をみなへし、また藤袴、あさがほの花。

春は草木の芽ざすと共に、さまゞの花の咲き出で、

殊に四月の初よりは、限なき花木の種類、一時に花開き、花散り、人は胡蝶と共に彼を賞し此を惜しみ、殆ど應接に遑なき有様なり。やがて青葉の蔭繁き夏となれば、さしも賑はしかりし百花の色も、一時に跡無く、俗に間の時ともいひて、目の觸るゝ所、野も山もたゞ一様の緑となり、炎熱の漸く烈しくなるに、人は皆心身殆ど困憊して、また花を思ふの閑なく、雨を待ち、風を迎へて、纔に晩涼に休息するのみ。

かくて秋風一夜西より至れば、果實は成熟して、自然の味を生じ、野山には種々の美はしき草の花ども、咲き亂れて、露にたわめるあり、またあたりの山林には食用に堪へざる小き木の實までも、さまゝの色を呈するあり、人はまた風月に親しむに至る。

秋の七草

げに秋の野の千草の花は、春の濃艶なるにも劣らざるべし。中にも上の七種の花は、

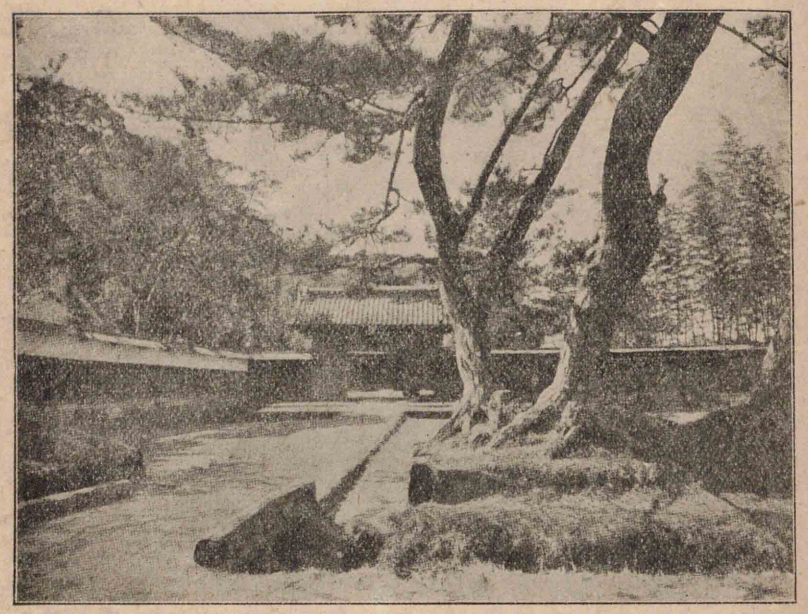
雅致　爽　蒔描　幽韻　邦

わが國の固有産にして、殊に雅致多きものを擧げたるものなれば、これによりて本邦に産する植物の品格を知るべく、また日本の氣候卽ち日本の秋氣のいかに清爽にして、人に適するかを知るに足るべし。且繪畫に、蒔繪に、これらの花を描きて、その幽韻を愛するなど、以て日本人の風流心を見るべし。外國には、これらの花の内にて、無きものもあり。また有りても、わが國人の如く深くこれを賞せざるが如し。

三三　傳家寶

細川潤次郎

豪華



江川太郎左衛門居宅

伊豆ノ韮山ナル江川氏ハ其ノ地ノ豪族ニテ、代々代官ヲ勤ムル家柄ナリ。中ニモ太郎左衛門英龍ハ、文武ノ道ニ名ヲ得タル人ニテ、海防掛トナリテ、國ノ爲ニ力ヲ盡クシシコト、人ノ善ク知ル所ナリ。此ノ人ノ居宅ハ

貼

既ニ數百年ヲ經タレド、改造スルコトナク、疊ノ破レタル處ニハ、紙ヲ貼リ附ケテ之ヲ繕ヒ、障子ノ紙ハ反古紙ヲ用ヰタル由ニテ、家風ノ質素ナルコト、想ヒヤルベシ。

江川英龍

高島秋帆先生、或時英龍ヲ訪ヒ、午飯ヲ共ニシタリシニ、主ノ膳椀ノ極メテ粗末ナルヲ見受ケタレバ、「何故ナレバ、カヽル器ヲ用ヰ給フゾ。」ト問ヒケルニ、「サレバ、コハ余ガ二十三歳ノ頃、妻ヲ迎ヘシ時、買ヒ調ヘタリシモノナルガ、ソレヲ日用ノ器トシテ、今日ニ至レルコトナレバ、已ニ數十年ヲ經テ、斯クハ古ビタルナリ。」トイヘリ。秋帆先生イタク感ズル所アリテ、「何トゾ此ノ器ノ中一ツ二ツヲ賜ハリテ、子孫ニ傳ヘテ勤儉ノ模範トセバヤ。」トイヒケレバ、汁椀ノ蓋ト飯椀ノ蓋トヲ與ヘラレヌ。先生之ヲ持チ歸リ、工人ニ言ヒ付ケテ、桐ノ木ノ箱ヲ作ラシメ、箱ノ蓋ノ上ニ傳家寶ト題シ、蓋ノ裏ニ

斯蓋

高島秋帆

剝　擢　尻　乞食　觸

右ノ由ヲ書キ付ケテ、折々ハ人ニモ示サレタリキ。之ヲ見ルニ、椀ノ蓋二ツトモ、内側ハ朱塗ニテアリシナラン。サレド大カタハ剝ゲテ、剝ゲヌ處ハ後ニ朱漆モテ繕ヒタル處ナリ。其ノ一ツハ、半バ過グルマデ割レ目通リタリ。外面ハ黑塗トハ思ハルレド、一點ノ漆ハナクテ、木地ノミ見エワタリヌ。絲尻ハ摺リヘラサレテ、高キ處トテハナク、尻ノ平カナル處ト一ツニナレリ。カヽル見苦シキ椀ヲバ、乞食ダニモ持タザルベキヲ、江川氏ノ朝ナ夕ナ手ニ觸レラレシハ、尋常ノ人ノ及バザルコトナランカシ。

三四　リンカーンの少年時代その一

リンカーン

完全無缺の人物は、古往今來、決してありませぬ。たゞし完全に近い人物を求めたならば、アブラハム、リンカーンのやうな人は、實にその一人でありませう。

リンカーンはアメリカ合衆國第十六代の大統領であります。智あり、勇あり、義あり、愛あり、その德は萬世に輝き、その澤は四海に溢れる人であります。私は今

聊か

この大人物の少年時代の話をして、聊か追慕の意を表したいと思ひます。

リンカーンの生家

かやうの大人物も、その生まれは極めて賤しく、生まれた處は、ケンタッキー州の中の、當時ハルヂンと稱へられた片田舎で、兩親は極めて貧しく、家といふほどの住居もなく、

呱々

炊

斧

墾

丸木の小屋に住んでゐました。この丸木小屋こそ實にリンカーンが呱々の聲を擧げた處であります。時は西暦千八百九年二月十二日の事であります。

父は憐な日雇で、日々他人の田畑に立働き、母は炊事、裁縫、一切の家事を勤める外に、他家に洗濯に雇はれたり、近傍の森や林に薪を拾うたりして、その日その日を辛うじて暮してゐました。リンカーンは七歳の時から、父について、森に行つては小い斧を握つて開墾の業を助け、畑に出ては、鍬を執つて耕作の手助をもして、十年餘り少しの暇もなく、營々と勞働を續け

値

ました。

かやうの貧苦の間にも、常にかれを教へ、かれを勵まして、他日の大成の基を作つてくれた人がありました。それは誰でもない、かれの母親でありました。この母親は、素性の賤しいのに似ず、至つて賢明な婦人であつて、人間の價値は、その身の富貴と貧賤とによつて定まるものではなく、その精神の如何によるものであることを常に教へました。さうして

「御前を學校に入れて、學問をさせたいのは、山々であるが、今の貧乏な身分では、それもかなはぬ。せめ

俯

ては、母が覺えた一通りを教へるから、農事の暇に精出して、勉強しなさい。」

と、懇に言ひきかせて、第一に習字、次に讀方を教へ、朝は早く起しては習はせ、夜は疲勞を忍ばせては教へました。

ところが、不幸にも母親はリンカーンの十歳の時、あへなくなりました。リンカーンは天を仰ぎ地に俯して、歎き悲しみました。父はもとより日々の勞働に追はれて、子を顧る暇はありませぬ。母の亡くなつた後のリンカーンは、暗夜に燈火を失つたやう。

許　涯　个

「せめて一年、半年でも小學校に通ひたい。」

と、切りに父に訴へましたので、父も餘りの不便さに、遂にこれを許しました。リンカーンは天にも昇る心地で、一度の缺席をもせずに、九哩餘の路を、日々田舍の一小學校に通ひましたが、哀にも、赤貧ゆゑに、僅に九个月で廢學せねばならぬことになりました。嗚呼、リンカーンが後にも前にも、一生涯中に受けた學校教育といふのは、たゞこの九个月きりであります。

これからリンカーンは日々鍬を執つて田畑に働く身となりましたが、種を播き、草を刈る時にも、常に二

綴　怜悧　諳

三の本を傍に置いてゐました。その本は、綴字書、算術書、文法書の三種でありました。リンカーンは性質が怜悧で、精神が不屈であつたので、耕作の暇々に、露天の下で、教師もなしに、よく本を理會することが出來ました。かうして、程なく、三書の一章一句も殘さず、悉く諳記するやうになりました。

三五　リンカーンの少年時代その二

十三四歳の頃、リンカーンはかねてその名を聞いて、その功業を敬慕してゐたジョージ・ワシントンの傳記

棚憎隙　述

が隣家にあることを知り、一日、思ひ切つて借覽を請ひました。幸に快く貸してくれましたので、リンカーンは鬼の首でも取つた心地で、雀躍して家に歸り、丁寧に戸棚の中にしまつて置きました。ところが、あやにくの夜大風雨があつて、大事な借りた本は、壁の隙間から吹込んだ雨に濡れて、さん〳〵になりました。リンカーンは大聲あげて泣き、小兒心に心配しまして、その夜は終夜眠られませんでした。

いろ〳〵と案じわづらひましたが、正直に事實を述べて、罪を謝する外はないと、決心して、リンカーンは、

捧記　尤　遍

翌朝、濡れ破れてページもわからぬ本を捧げて、隣家に行き、泣いて詫をし、

「つぐのひに、二日でも三日でも勞働をさせて下さい。」

と賴みました。貸主もその心を察して、別段に尤めず、望にまかせましたので、ワシントン傳を携へて家に歸り、丁寧に乾かして、晝夜の別なく讀み耽りました。以來、讀破數十遍、ワシントン

リンカーン、ワシントン傳を讀む

の品性、事業に深く感化されて、遂にはこの大人物を體得するやうになりました。

リンカーンが一農家の僕となつてゐた頃、或日、一人の旅客がその家に宿つて、深更に厠に行き、ふと見ると、庭の木立を洩れて、燈火の光がさして來るのであります。はて、不思議と、竊に行つて見れば、思ひがけなくも、裏の粗末な長家に、一人の少年が一心不亂に讀書をしてゐます。旅客は非常に驚いて、翌朝、家の主人に聞きたゞしますと、主人も、

「かれは感心な少年で、晝間は畑に出て、寸暇を得ると書を讀み、夜も夜業が終れば、更けるまで勉強し、わからぬ事があれば、人に質し、學問をこの上ない樂としてゐる。しかも溫順で、謙遜で、さうして正直によく働いて、才智もあれば、情愛もある。まことに末頼もしい少年である。」

と答へたと、いふことであります。この少年は、言ふまでもなくリンカーンその人でありました。

「艱難汝を玉にす。」リンカーンが他日大統領となり、世界の大人物として萬人に仰がれるやうになつたのも、實にこの少年時代に、貧窮の經驗から得た教訓の

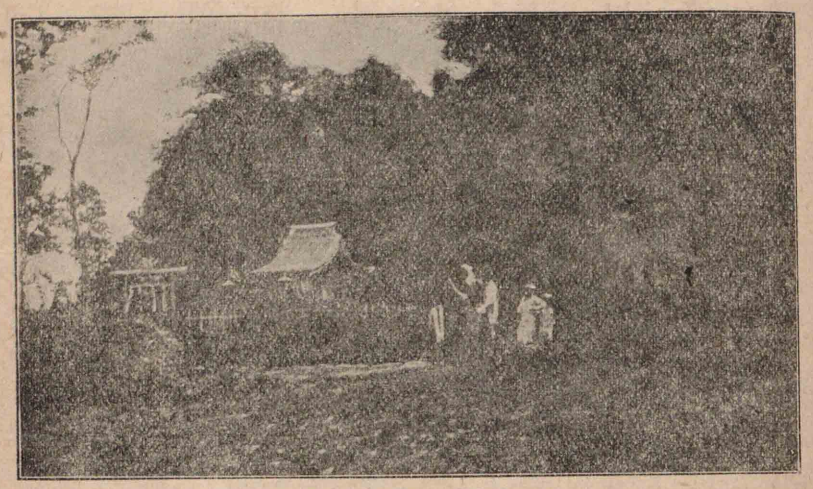
賜であると思はれます。（阿ブラハム＝倫コルンによる）

施　禽獸　傑

三六　二宮尊德の幼時　その一

幸田露伴

徒らに起き、徒らに眠り、空しく食ひ、空しく衣て、何事も爲すなきは、禽獸にあまり遠からぬ人なれば、尊ぶに足らずといふべし。學んで知を蓄へたる人は尊ぶべし。勤めて業を成せる人は又尊ぶべし。志して道を求むる人は愈尊ぶべし。誠ありて德を施せる人は又愈尊ぶべし。二宮尊德先生は今もなほ數多の人に神の如く尊ばるゝ、近世の君子とも豪傑ともいふべき



二宮先生誕生地の址

人なり。

先生は天明七年七月二十三日相模國足柄上郡柏山村といふ片田舍に生まれたり。先生の五歳の時、酒勾川の洪水に、田畑の荒れはててよりは、もとより貧しかりし家の愈貧しくなりて、先生と先生の弟三郎左衞門、富次郎の二人とを育

隱

つることだに、容易からぬほどなりき。先生その中に漸く長じ、草鞋を作り、賣りて、酒を求めて、夜毎に父に進めたり。

十四の年、賴みとしたる父に別れて、貧苦いや增せり。母は是非なく、「汝と三郎左衞門とは如何にしても養ふべけれど、末子までは力及ばず。ぜん方なければ、緣者の許に預くべし。」とて、心强くも富次郎を他處に預けたりしが、さすが恩愛に引かされて、夜毎に眠もせざる樣子なり。先生之を見て、「何故に毎夜やすくと寢ねたまはざるか。」と問へば、母は、「乳の張る故に。」と言

悟　迫　厭　恙

ひ紛らし、よそを向きて、涙を隱し、悟られじとするを、先生早くも察して、涙にうるむ眼をしばたゝきつゝ、「何程、貧に迫れば、とて、赤子一人ぐらゐ物の數にもあらじ。夜さへろくく御よりなされぬ悲をかけたてまつるよりは、小腕ながらも、明日より山に薪こりて、弟を養ふほどのことは致すべし。早かの子をとり返したまひてよ。」といへば、母は悅びて、夜の更けたるをも厭はず、直ちに隣村に到りて、事の子細を語り、富次郎を引取りて、抱き歸れり。

これよりいぶせきあばらやの中にも、親子四人恙な

く打揃ひて、顔見あはするを樂しみ、先生は朝まだきより山に入りて、薪を採り、夜は更くるまで繩をなひて、草鞋を作り、一寸の日影も惜しみて、ひたすら母のため弟のためと日毎に勤め勵みたり。この間にも、先生は、「人と生まれて、聖賢の道も知らずに過ぎなんは、口惜しきことの限なり。」と

二宮尊德及びその自畫

て、纔に得たる大學といふ本を常に懷に離さず、薪こ

る山路の往き復りに、歩みながら讀みたり。その心掛誠に尊し。

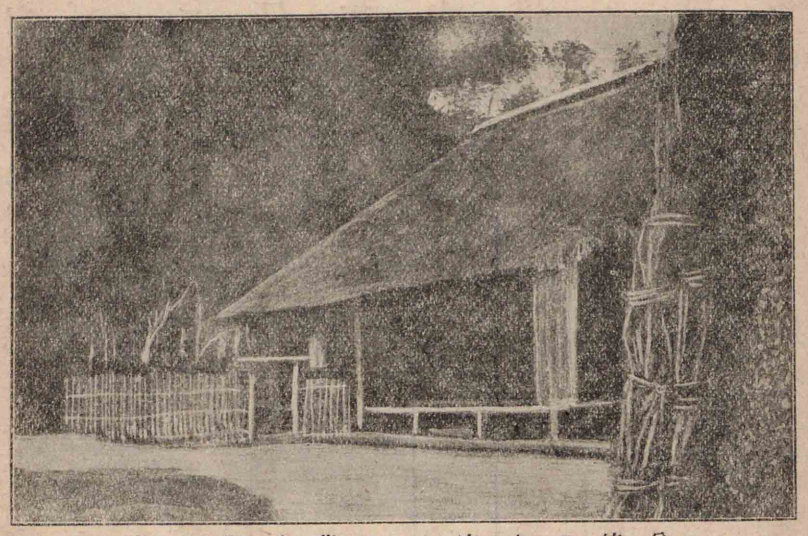
三七　二宮尊德の幼時　その二

十六の年には、母さへ疾に罹りて、三人の子を遺して世を去りたれば、先生は何一つなきあばらやの中に、まだ幼き二人の弟をかき抱きて、歎き悲しむばかりなりき。親類たちはこの樣を見かねて、互に相談をなし、仲と季との二人を川窪某引取り、先生一人は萬兵衞といふ伯父の許に養はれたり。

補播

萬兵衛は元來吝嗇にて、情も知らぬ者なりき。先生が終日立働きて、夜わづかに學問の道をたどりけるを、なほも罵りて、「われ汝を養ふに、多額の費用を要す。まだ力なき汝の働、何程の補になるべきか。さるにそれをも省みずして、自分勝手の夜學にわが油を費すは、不屈なり。」と叱りこらすに、先生は無理とは知れど、爭はず、「さりとて一生文盲の人とならんも殘念なり。わが自力にて學問せば、まさかに叱もせざるべし。」と思ひければ、川べりの荒地に菜を播きて、七八升の實を得、燈油に代へて、夜々獨り苦學せり。無慈悲の萬兵衛

逆筵　漏蔽



尊德の寄寓せし萬兵衛の家

また罵りて、「學問せんより、縄をなひて、わが家事の手助せよ。」といひかけたり。先生はこれにも逆らはず、縄なひ、筵織りなど、油斷なく立働きたる後、ひそかに燈を點じ、衣にて燈火の漏れぬやうに蔽ひかくして、勵み勉むるわが心をわが師と

なし、雞の鳴く頃まで、毎夜讀書しけり。その辛苦のほど、察しても涙のこぼるゝばかりなり。

このうちにも、先生が家を興さんと思ふ心は、未だ一日も撓まず。人のかまはぬ土地を耕し、人の棄てたる苗を拾ひて、其處に植ゑつけ、一俵餘の收穫を得たり。先生大いに喜び、「少きを積みて多きをなすは、自然の道なり。今こそ僅に一俵なれ。これを種として勤勞せば、わが家を興すこともなるべし。」とて、法を考へ、力を盡くして、油斷なく勤めたれば、遂に多くの收入を得たり。是に於て數年間の養育の恩を謝して、萬兵衛が

撓

家を辭し、人住まざればいとゞ荒れ果てたる、わが舊宅に立歸り、草を拂ひ、屋根を繕ひ、たゞ一人必死となりて家業を勵み、粗衣も厭はず、粗食も厭はず、千辛萬苦に堪へ忍びて、田畑も遂に買戻し、立派とまでにはゆかざれども、全く一家を興すことを得たり。

嗚呼、先生の將來大いなる事業をなしたるも、この時までの心がけによるといふべし。

戻

三八　廣瀬中佐

巖谷小波

神州男兒、數あれど、

廣瀨中佐
海軍中佐廣瀨武夫。

閉塞

捧

男子のうちの眞男兒、
世界に示すかゞみとは、
廣瀨中佐がことならん。

すでに一度死を期して、
旅順閉塞に向かひしが、
事意に滿たぬ無念さは、
ふたゝびむすぶ決死隊。

もとより君に捧げし身、

杉野兵曹長
海軍兵曹長杉野孫七。

股肱

妻も迎へず、子も持たず、
父の寫眞と兄のふみ、
これぞはだへの守なる。

かゝる强將上にあり、
下に弱卒などあらん。
中にも杉野兵曹長、
中佐が無二の股肱なり。

上下心を一にして、

入るや虎穴の奥深く、
その大任は、船底に
積める石よりなほ重し。

廣瀨中佐　杉野兵曹長

（東京市神田萬世橋驛前建立）

探海燈はいなづまか。
水雷は、げにいかづちか。
中をひるまず、悠々と
行くや、名に負ふ鬼中佐。

港口ふさぎて、爆沈し、
任務はかくて果ししに、
兵曹長はいかにせし。
姿も見えず、影もなし。

「杉野はいづこ。杉野よ。」と
呼べど、答はあら海に、
こだまと聞くは、砲彈の
船にくだくる響のみ。

三たび求めて、三たび得ず。
「かくては君もあやふし。」と
促されつゝ、本意なくも
小舟に移り乘らんとす。

轟然
肉塊
俠血
朽

時しもあれや、轟然と
耳をつんざく敵彈に、
血煙、船に立ちこめて、
中佐の姿はやもなし。

五尺の體の名殘なる、
たゞ一寸の肉塊は、
忠血、義血、俠血の
千古に朽ちぬ寶ぞや。

七度人と七生報國、一死心堅、再期成功、含笑上船（廣瀨中佐）

あな、いさましの軍神、
七度人とうまれきて、
わが帝國や守るらん。
わが帝國や護るらん。

三九　國引

伊弉諾尊、伊弉冉尊の御生みになつた日本は、初の程は小くて、足らぬ處が多かつたが、子孫の神々がだんだんに修理を御加へになつたので、今のやうな立派な國となつたといふ。

出雲の國は取分け小かつた。幅が極狹くて、帶のやうであつた。素戔嗚尊の四世の孫に當られる臣角命が、「いかにもこれでは狹過ぎる。ちと縫ひ足さなければならない。」と、思召し立たれた。

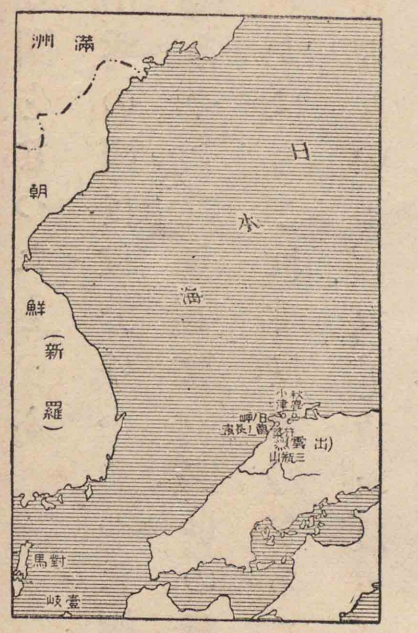
そこで、海岸の巖の上に立つて、何處かに國のあまりは無いかと、遙に西の方を御覽になると、ひろ〳〵とした大海を隔てて、あなたに新羅の國が見える。

「おゝ、ある、ある。新羅の岬に國のあまりがある。あれを引き寄せて、この國に縫ひ合はせよう。」

伊弉諾尊
伊弉冉尊
素戔嗚尊
臣角命
縫
巖
隔
新羅

と、臣角命は神通力をあらはして、その新羅の國の出端をずばりと切り分けて、さて三つ撚の大綱を掛けて、その國の片に結びつけ、えいや、えいやと手ぐり、そろりそろりと引き寄せて、

「國來い。國來い。此處まで來い。」



小津 島根縣出雲島根半島の西端にあり。同縣簸川郡北濱村小津浦なり。

と、とう〳〵引きつけて縫ひ合はせられたのが、小津から日の岬までの邊である。この國引の綱を繋ぎ止めた杙が卽ち今の三瓶山といふ山、又その綱は今の薗の長濱である。

三瓶山 出雲石見に跨る高山。

薗の長濱 島根縣簸川郡園村にあり。

まだこれでも出雲の國が小いので、今度は北の方に國のあまりは無いかと御覽になると、滿洲の方に大分廣い處が見えた。早速其處を切り分けて、又もや三つ撚の綱を掛けて、

「國來い。國來い。此處まで來い。」

と、引き寄せて、接ぎ合はせられたのが、もとの秋鹿郡あたりになつた。

「今少し足さう。」

秋鹿郡 今島根縣八束郡に併せられたり。同郡に秋鹿村あり。

と言つて、東北の方を捜して、其處の國のあまりを引き寄せられた。かうして、とう〳〵今日の出雲の國がすつかり出來上つたのであるといふ。

神代から幾千萬年たつて、明治四十三年になつて、あのちぎり殘りの朝鮮の全部も、遂に悉くわが日本に引きつけられてしまふことになつた。（古事記噺による）

中等教育國語讀本　卷一　終

大正六年十月十七日印刷
大正六年十月二十日發行
大正七年一月七日訂正再版印刷
大正七年一月十日訂正再版發行

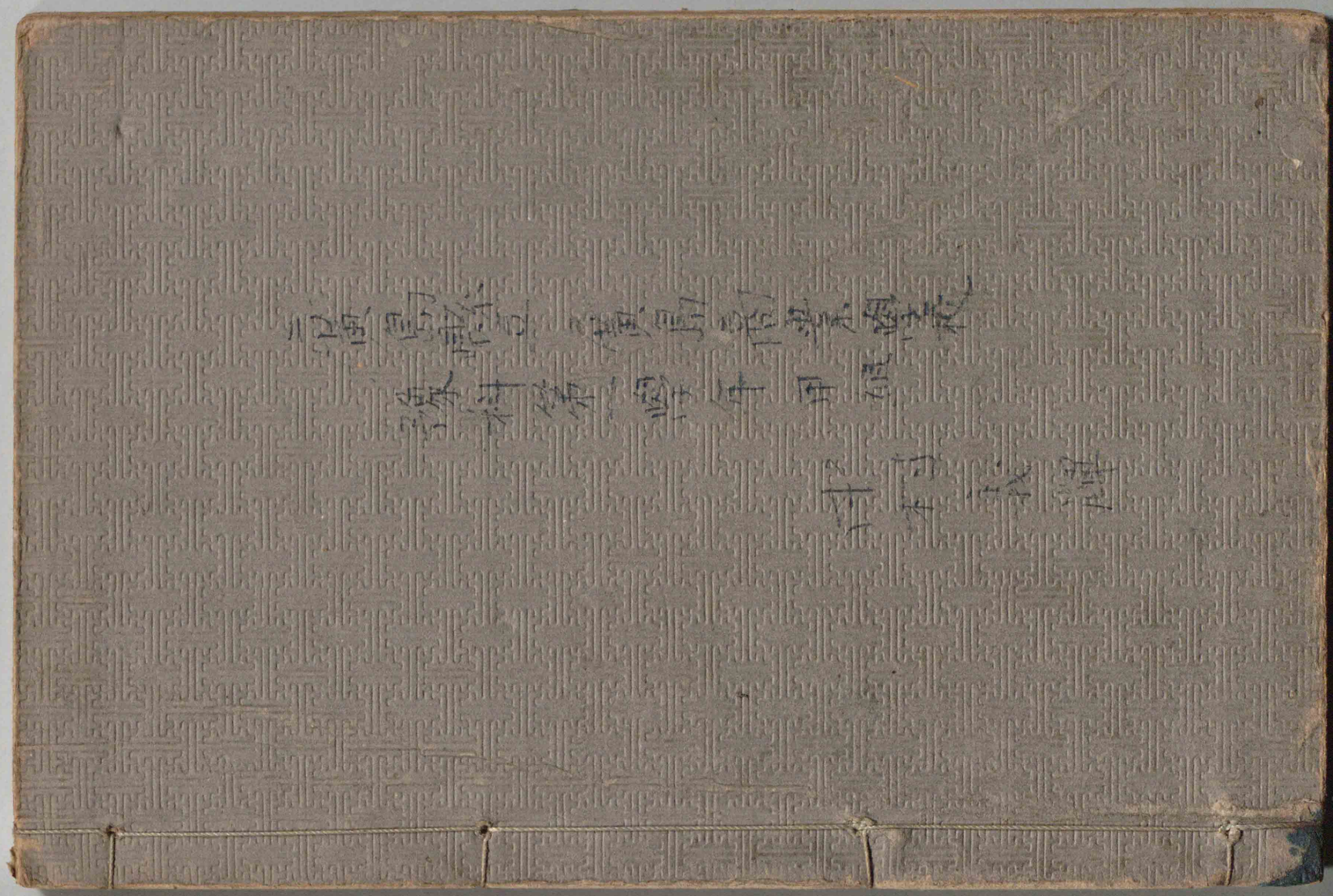
中等教育國語讀本
定價
卷一、二各金參拾五錢
卷三、四各金參拾貳錢
自卷五至卷十各金參拾錢

大正七年度臨時定價
卷一、二各金四拾錢
卷三、四各金參拾七錢
自卷五至卷十各金參拾五錢

著作者　東京市小石川區小日向水道町七十三番地　新村出
發行者　東京市京橋區築地三丁目十一番地　西野虎吉
印刷者　東京市小石川區小日向水道町七十三番地　野村宗十郎
發行所　東京市小石川區小日向水道町七十三番地　開成館
【振替貯金口座】東京第五參貳貳番
西部販賣所　大阪市東區心齋橋通北久寶寺町角　三木佐助
東部販賣所　東京市日本橋區數寄屋町九番地　林平次郎

大正九年度臨時定價金六十錢

大正九年度臨時定價金五拾六錢

著作權所有
本書原圖
嚴禁轉載
不許複製

（株式會社東京築地活版製造所印刷）